

國へ歸りました頃には止めまして其代りに一週間一度火曜日は肉の無い日と極めまして、其他の六日は芋が無い火曜日に肉が無ければ芋が食へるのであります、それから又國內の耕作なども始めて居ります。もう一つ御耳に達して置きたいことは、英吉利では自國の根本的改良をしなければならぬと云ふことで、現在の文部大臣に依つて教育の大改革案が出來たのであります、英吉利は此戰爭の爲に工業其他の事に付て確かに覺醒をしたと云ふ感じが致します、又佛蘭西も矢張り大同小異で緊張した氣分は非常であります、此頃の佛蘭西は實に質素であります、又覺醒もして居ると思ひます、歐洲の此等の大國が一旦奮發したならば戦後に於ける國際間の商工業の競争は烈しきものと思はなければなりませんまいが、やうに緊張した所を見て日本へ歸つて来て見ますと、非常な「コントラスト」であります、歸途滿洲で新聞を見ますと内地は此頃は景氣が宜くて成金が出来て、何とか云ふ子爵が古道具を賣つたら、其の中の一の掛物を何十萬圓とかで買て贅を盡して居る奴があると云ふ記事を見て妙ながらず不快に思ひました。歐洲の先進國では目下大に緊縮した氣分で奮勵一番して居るのに後進の日本でかゝる浮調子であつて宜いのであらうか私は歸り勿々頗る悲觀して居る次第であります、餘り長くクダヽしく申上げても恐れ入りますから又あとで座談として御話しても宜しうござりますから是にて止めます。(拍手)

論說及報告

隅田川河口改良工事

(其貳)

東京市河港掛長技師 準員 田 村 與 吉

第貳期工事 第一章

第壹節 本計劃ノ由來

吾人は第一章に於て本市の地形地勢より我が隅田川と本市の關係を明かにせり、東京市にして單に政治的都市にして統治機關の所在地たるに止らは即ち止む、然るに我が市は人口貳百萬を超へ百數十萬噸の石炭と數萬キロノ水電力を消費しつゝあるを以て重要な消費地たるのみならず他方是等の動力は盛に産業に利用されつゝあるより見れば又産業的都市と云ふを妨げざるへし、消費生産の何れの都市たるを選ばず其施設として交通機關の整理改善は蓋し最も緊急の施設なるへし、之れにより消費者は日用品を低廉迅速に供給を得又生産者は原料並製品の輸送に多大の便利を得特に産業界にありては其要素たる原料資本、労力等は經營の初期より明かに打算し得るか故に經營者にして當を得るに於ては其間甚しき巡廻ながらしめ得るを以て産業競争の輸贏は一に懸つて運輸機關の便否により決せらるへし、斯く論し來れは我が東京市の發展の序幕は貨物輸送の大道たる水運の整理改善により開かれざるへからざるは識者を俟たずして明なり、かるか故に吾人は先きに第一期隅田川口改良工事を起して先隅田川口の浚渫を行ひしも深く財政を考慮し工費を制限せしめた其幅員並に深度に於て吾人の満足に價すへきものにあらざりしも改良の第一步として舟業者の不安を解き且つ満潮を利用して出入しつゝありし四五百噸級以下の小型帆船に對し聊か航行自由の途を啓くの急に應したり然とも外國貿易船は勿論壹千噸内外の内國貿易の小型汽船すら通航し能はざることは果して本市の商業界を裨益するものなるや其否たる問はすして明なり之れ即ち第貳期工事起工の必要を喚起するものにして又其機運は當然來らざるへからざるなり、然とも第貳期工事は幅員を擴大すべきか深度に於て増鑿すべきか問題は此點にあり、夫れ航路に於ける深度の不足は内外貿易船の直接入港を妨げ工績を半減する最大の缺點なるか故に是れか增加は最も緊要にして其完成は大小船舶の頻繁なる出入

を促かすは殆ど疑義の余地なきか如し然らば即ち其結果たるや、さらぬたに隅田川口附近の幅員は船舶の轉向若くは移動に不足となし或る一部の識者をして之れを船渠として利用するを難せしむる主要點なれば深度の増加は航路幅員擴大の要求を生む先駆にして結局する處我河口は五拾間乃至七拾間の幅員を以て満足さるものたらざるは明かなり、されば航路に於ける幅員増加の必要は只時間の問題に過ぎざるを以て目前の急務たる彼れを擋ひて是れを先んずるは一見姑息の觀なきにあらざるも深く工事經濟を顧み施工順序を定むるときは先づ斯の如き計畫をなすの妥當にして且つ止むを得ざるものなることを知らるへし、而して他方水運整理の根本問題たる築港設計を提げ時期を俟つて一舉之れが解決をなすは本市の産業上は勿論都市經營上最も重要なこととなるへし、而して工事機械器具の如きは殆んど全部のもの既に第壹期工事に於て準備成り又關係諸員は前記工事の經驗により最も工事に熟達し經濟的に事業を遂行せしめ得る能力を有し且つ本市の呑吐する貨物の増加は人口の増加と共に確實なる統計を提供しつゝあるに拘はらず四圍の事情は多額の工費の支出を要する根本的改善を許さざる場合にありては蓋し採り得べき方法として吾人の計劃は最良のものたるを失はざるを以て本市々會に諮るに是か實施を以てす市會は明治四十四年五月廿四日之れを可決す次いで監督官廳並に港灣調査會の審議を經明治四十四年七月二十三日第壹期工事の完成を俟ちて其翌日より工事に着手するに至りしなり。

第二節 計劃の大要

第二期工事は先づ航路の幅員を出來得る丈け擴大し且つ別に小船艇の碇泊場を設置するを以て主眼となし是れより生ずる殘土を以て築港事業に適應する埋立地を造り該工事に資すると同時に本工事の一財源たらしむるにあり、即ち明石町地先より第一砲臺に至る濁筋を幅員百間の該砲臺より海中水深十二尺線に至る航路を幅員百二十間に擴げ又本流分岐點より相生橋間に於て派川濁筋の回はり

水面積約三萬五千坪を浚渫して水深九尺を有する船溜を設くるにあり。

以上の擴張浚渫と共に既成瀝筋の維持浚渫並に埋立地間及工事用運河の浚渫又は唧筒船作業場の維持により生する土砂無慮六十六萬坪に達する豫定なるを以て之れを利用し第壹期に於て半は完成せる舊第五號地本工事に於ては第壹期工事に依り築造されし埋立地を呼ふに舊第何號と稱すの殘部約一萬五千坪を完成し猶ほ別に約二十萬坪の埋立地を新築する計畫とす、而して埋立地の標高は第壹期のものと等しく基準面上十二尺にして猶ほ其位置面積は次表の如し。

名 称	位 置	面 積 (坪)
第壹號	舊第貳號地南方	四四、三一〇
第貳號	舊第四號地前面	二六、七七五
第參號	舊第五號地前面	三〇、八三一
第四號	同 上	五九、五八八
第五號	自芝區田町六丁目地先 至同區同町九丁目地先	二七、九五七
計		一八九、四六一

是等の埋立地は凡て築港設計に準據せるものと雖とも其利用發展を全からしめんと欲せは更に更に相當施設を要するは勿論なるも本工事は全部として既に大築港の前提をなすに過ぎざるを以て基礎的施設の外は築港事業の計劃に譲れり、兩埋立地間の標準運河は幅員十五間とす是れ兩岸に最大達摩船(幅員二十四尺)を繫留荷役する時に於て猶ほ且つ此種の船舶三隻並走し得る幅員を有すればなり、而して新第壹號舊第貳號間の運河の如きは將來に於ける樞要航路たるへきを慮り特に幅員を三十間に擴大し隅田川本流瀝筋との連絡を能くし是れか延長は幅員二十間とし舊四、五號と新二、三號の間を通り更に新四、五號の間を貫通せしむ、又目黒川口より新貳舊參號と新壹舊貳號との間を縫ふて古川口

月十年六正大

に併合し隅田川本流に達する三十間運河を設置す、而して以上記する外埋立地間の運河は凡て十五間とす、以上の計畫確定後工事實施に當り多少變更せしものなきにあらず、即ち相生橋附近に於ける船溜場面積の縮少及札の辻なる鐵道線路内入堀より發し舊第五號地に沿ふ運河の如き其後幅員十五間を十間に變更せしか如し。

埋立地周圍の護岸は凡て木造とし其構造は第壹期工事に於けるものと大同小異のものにして其詳細は卷尾第五圖に示せしを以て此所に説明せす。

本工事に使用すへき機器の主要なるものは凡て第壹期工事に於て購入せるものを再用するに過ぎざるも唯碎岩機は他より借入ること、せり又機械工場は明治四十三年十一月以降は市内河川浚渫事業に屬する船舶機器をも當工場内にて直營修理することとなり、旁々第一期工事の經驗より工場設備を増大するの必要を感じるに至りしも月島工場は構内擴張の餘地少なく其企劃を完ふする能はざるを以て第二期工事の初期に於て遂に之れを芝區芝浦日出町即ち舊第二號埋立地に移轉増築すること、し更に汽力鏈機「ブレーキ」旋盤、十九馬力瓦斯發動機、ポンチング、エンド、ジャリング、機圓鋸機等を増設せり、又月島工場に於ては土運船又は小蒸氣船一隻を修理し得へき小船渠を假設せしも工事の實施に當り上架を要する船舶多く該小船渠にては決して満足すへからざるを知りしを以て本工場を移轉するや直ちに船渠の替はりに收容力大なる船架築造の設計を立て工場の一隅に之を設くること、せり其寸法は幅員五十尺傾斜十六分の一とし其下端は普通護岸法線の外方七十尺にありて高さは基準面上零位に上端は護岸の内方百尺に延び下端より勾配に沿ふて百七十尺を算す、而して上端は零點上十尺六寸餘なり、本船架に於ては船長九十七呎幅員十九呎深さ五呎六吋重量百噸船尾浮上の際船首に及ぼす全壓力二十五噸のものを上架し得へし又同時に修理し得へき船數は鋼製土運船若くは小蒸氣船一隻に木製土運船四隻、木製土運船のみなる時は六隻を上架し得るも「ブリストマン」式浚渫機を載荷

せし臺船なるときは二隻を同時に修理し得へし以上その他第二期工事に於ては前期の機器を利用せり。
工期 工期は四箇年半と定め第一期工事の完成後直ちに着手し明治四十八年(大正四年)に於て完成する繼續事業とす。

工費 以上の工事に要する總工費は二百四十六萬八千二百十二圓にして財源は埋立地二十萬餘坪の内市街宅地面積約十三萬五千坪の賣却代金及第一期並に第二期工事に使用せる機器にして不用のものを拂下くるにより得るものとす。

右工費の年度割及内訳大要は次表の如し。

隅田川口改良第二期計畫工費支出年度割額

種 目	年 度	摘要					
		四十四年度	四十五年度	四十六年度	四十七年度	四十八年度	計
浚渫埋立工費	三三七〇円	三三六五円	三七四七円	三四八七円	二七〇七七円	二四七五円	同上
護岸工費	三五八〇円	九六四〇円	八一〇〇円	七〇〇〇円	六〇〇〇円	四〇〇〇円	零款
雜工事費	三九七〇円	八二四〇円	七一〇〇円	六〇〇〇円	五〇〇〇円	三〇〇〇円	零款
機械器具費	八六〇〇円	六〇〇〇円	六〇〇〇円	六〇〇〇円	六〇〇〇円	六〇〇〇円	零款
測量調査費	四〇〇〇円	二八〇〇円	二八〇〇円	二八〇〇円	二八〇〇円	二八〇〇円	零款
事務所費	二〇〇〇円	一五〇〇円	一五〇〇円	一五〇〇円	一五〇〇円	一五〇〇円	零款
豫備費	五〇〇〇円	一五〇〇円	一五〇〇円	一五〇〇円	一五〇〇円	一五〇〇円	零款
計	四四二七〇円	五九八四六円	五五四七二円	五二五五五円	四〇四四元	三四六六二三円	同上

計畫の變更 開田川改修工事は第一期第二期を通じ總て築港計畫に準據し畫策せしと雖も當時に

於ける築港計畫は洪水の都度大量の泥砂を搬流する隅田川の禍害を避け其維持を容易ならしむるは其設計に於て考慮すべき緊要事項の一なりしも明治四十三年六月に於ける大洪水は帝都に慘酷なる被害を課せり是れか爲め却つて荒川改修に關する國策の設立を促進し治水の大方針確定を見しを以て築港計畫に於ても最早荒川の出水土砂流出の名に於て舟運の便至大なる隅田川口の直接利用を忌避する理由全然存在せざる迄に至らすとするも頗る稀薄となりしを以て寧ろ之れを包容し市街と港との連絡を一層密接にするを却つて一要件とせざる可からざるに至れり是れか爲め隅田河口改良工事の如きも設計上多少の變更を要するは又怪しむに足らざるへし、即ち河口航路の第四第五砲臺に差しかかるや在來航路の如く第一砲臺方面に偏することなく直ちに一直線に羽田港口に向はしむ之れにより將來作らるべき港口は本港に入る關門なると同時に又隅田川本流の正門たるに至らしむるにあり而してかかる變更は頓て來るべき築港工事の一部をなすものにして利用上其便頗る大なるを以て大正元年十月十八日本市々會は此變更を認め水深十二尺幅員八十間の新航路堀鑿を可決す、是れより作業の内容は多少の移動ありしも浚渫土量並に工費は凡て前豫算を變更せざるものとせり但し本變更と同時に埋立地々形の一部を次の如く訂正す。即ち

名 称	位 置	面 積
第一號	變更なし	變更なし
第二號	同	三三・五七四
第三號	同	二七・二一九
第四號	同	變更なし
第五號	同	二八・九四一

其後大正二年七月二十八日市會は添筋を確定し且つ土砂の埋没を輕減する爲め砲臺外直線航路の

兩岸に導流柵を設くること、し是れに要する工費豫算金九萬參千貳百貳拾五圓は先きに決議せし第二期工事費の内より捻出支辨する案を可決す、次て同年十月二十一日開會の市會は陸上施設の一つとして既定市街區畫に基き主要道路並に假下水の築造を決議し工資金七萬八千九拾四圓九拾錢は前記工事同様確定工事費の餘剰見込額の内より支辨することを承認す。

越へて大正三年五月二十二日埋立地給水設備費として工費豫算金七萬參千八拾五圓を決議し之れか財源は事業費繰入金に依ること、せり、以上小追加工事に依り市街地として居住し得べき主要設備を加へ而も是等の工費は既定工事費の節約經營により生産せしと雖も作業の熟練は更に多くの殘餘金を残し浚渫殘土又餘剰を生する見込み愈々明瞭となりしを以て大正三年十二月八日更に市會に諮るに追加埋立地を二三、四號埋立地々先に新設することを以てし市會は之れに協賛を與へしを以て更に港灣調査會の査定に聞き第六號埋立地を起工するに至れり、其面積二萬七千九百七十八坪餘にして之れを先きに確定せる五埋立地に合算するときは埋立計畫總面積二十二萬一千餘坪を算するに至れり、但し本埋立地に要する土砂不足に對しては大正五年度より本川口維持の爲め經常費を以て施行しつゝある浚渫工事より生ずる土砂を以て補充すること、せり。

埋立地の位置 各種護岸の配置其他埋立地間の連絡用橋梁並に導流柵の位置等に關して説明の及はざる處あるは卷尾の附圖に記載す然も橋梁の構造等に至りては一般木橋にして特記する必要あらざるを認め只工事概要欄に一表を挿入し説明附圖を省略せり。

第參節 工事概要

明治四十四年七月二十三日隅田川口改良第一期工事の竣工に次て同月二十四日同第二期工事を起し爾來歲を閏する事五ヶ年有九ヶ月大正六年三月十五日を以て全く其工を竣れり第二期工事に於ては浚渫埋立諸船艇等の充實及從業者の熟達と相俟て鋭意工事の進捗を計ると共に終始工費を節約し

て經濟的作業を爲すに題めたりし結果は其成績大に見るへきものあり當初の豫定計畫以外新舊埋立地道路下水工事及砲臺外新航路導流柵工事を施行し尙浚渫土砂に於て既定埋立以外過剩土量を生したるを以て新に第六號埋立地を追加起工し工費豫算金貳百四拾六萬八千貳百拾貳圓に對し中止したる工事費以外四拾六萬餘圓の巨額の剩餘金を残して大正五年三月浚渫工事及土砂埋立を了ると共に埋立土砂地均の一部及護岸橋梁道路其他雜工事の幾分を除くの外殆んど竣成に至りしを以て同年四月以降周圍の狀況に鑑み其規模を縮少し經常費に屬する既成航路維持浚渫作業と共に臨時費殘部工事に對し極力其工を急ぎ茲に全く其工を終るに至れり本工事の細目に至りては以下順を追ふて記述することゝし更に其大要を摘要するときは次の如し。

航路延長 五〇四〇間内(砲臺内 三、三〇〇間
砲臺外 一、七四〇〇間)

浚渫面積 四四四、〇〇〇面坪

浚渫土量 六五三、九一七立坪餘

埋立面積 二〇八、七五九面坪餘

同 二七九七八面坪餘

即ち第六號埋立地に屬するものにして第二期工事としては完成せり
に至らず不足土坪は其後維持浚渫により得し土砂を以て完成せり

埋立土量 六五七、九六〇立坪餘

而して是等の内容は次に記述すへし。

浚渫工事 浚渫は本工事附屬工事準備工事の三に分ち本工事とは航格港筋の浚渫を云び附屬工事とは埋立地間運河及船溜等の浚渫を稱し準備工事とは唧筒式浚渫機操業所なる土捨場及土運船航路の浚渫を云ふものにして埋立工事施工上一時的に必要な工事なりとす是等工種別浚渫土量左表の如し。

工種別浚渫土量表

船 名	軟 層	堅 層	計	備 考	
				駒形丸	白髯號
駒形丸	三〇七、四〇四 <small>水坪</small>	九六六	四、二八七 <small>水坪</small>	七三一	一六一、三〇三 <small>立坪</small>
白髯號	一六一、三〇三 <small>立坪</small>	七三七	四、一九一	七九三	五七、八一五 <small>立坪</small>
玉姫號	五七、八一五 <small>立坪</small>	三二三	一六五、四九五 <small>立坪</small>	五二九	四三、七六二 <small>立坪</small>
第二千代田號	四〇、二三三二九七	二、二二二七一二	一〇一、五七七	七五二	四二、四三六
					〇〇九

各船別浚渫土量表

航路浚筋の浚渫は主として三隻のバケツ式浚渫機駒形丸、白髯號及玉姫號により尙土炭岩層の存在する區域は碎岩の上玉姫號を以て浚渫せり運河及船溜の浚渫は主としてブリーストマン式浚渫機第二、第三千代田號を使用し土捨場及土運船航路等は兩式の浚渫機を混用したり。

浚渫土砂はバケツ式にありては主として十坪積側開土運船に積載し曳船にて之を埋立地に送りブリーストマン式にありては主として二坪積土運船を使用し之か運送は距離の遠近に従ひ人力又は曳船によれり各船別浚渫土量を示せば左表の如し。

本工事	軟層	堅層	計	備考
四六九、三二八 <small>立坪</small>	〇六一	四〇、五〇四 <small>立坪</small>	五〇九、八三二 <small>立坪</small>	
一三六、八四二八七九	一二、六三三	四七三	五三、四	
六〇六、一七〇九四〇	五三、一三八	八四六	六五九、三〇九	
	三二九	一四九、四七六	七二五	
		七二五		

說及報告

第三千代田號	三五、五八六	一三六	二、五二二	二三六	三八、一〇七	二七二	七八〇
計	六〇二、三三三	四五八	五六、九七五	八〇一	六五九、三〇九	二五九	
浚渫費			二九三、七六四、八三六				
曳船費			二一六、七七四、〇四三				
土運船費			二二〇、一〇八、二九九				
計			七三〇、六四七、一七八				
一坪當工費			一一〇八				
碎岩工事	浚渫區域中凝灰質粘土即ち俗稱土炭岩の露出せる部分は芝浦日の出町地先一帶及海軍 大學校地先附近一帶の航路にして上掘の上十噸碎岩機を以て破碎したり本工事は起工と共に着手大 正元年八月二十七日を以て竣工せり碎岩立積及作業に要したる工費等左の如し。						
碎岩面積	三〇、一六〇、四 <small>面積</small> 五						
碎岩立積	四五、二一九、九 <small>立積</small> 二〇						
碎岩費	一〇〇、四四、七八三 <small>門</small>						
一坪當工費	〇、二二二						
運河又は船溜内にして十噸碎岩機を運轉し得さりし日の出町及南濱町間一帶の個所はD型ブリ ークトマン式浚渫機を利用し約三噸の碎岩錐を以て破碎し同浚渫機を以て浚渫したり、							
碎岩面積	七二九五、三三三						

以上浚渫作業に要せし工費左の如し。

碎岩工事 浚渫區域中凝灰質粘土即ち俗稱土炭岩の露出せる部分は芝浦日の出町地先一帶及海軍
大學校地先附近一帶の航路にして上掘の上十噸碎岩機を以て破碎したり本工事は起工と共に着手大
正元年八月二十七日を以て竣工せり碎岩立積及作業に要したる工費等左の如し。
碎岩面積 三〇、一六〇、四面積五
碎岩立積 四五、二一九、九立積二〇
碎岩費 一〇〇、四四、七八三門
一坪當工費 〇、二二二
運河又は船溜内にして十噸碎岩機を運轉し得さりし日の出町及南濱町間一帶の個所はD型ブリ
ークトマン式浚渫機を利用し約三噸の碎岩錐を以て破碎し同浚渫機を以て浚渫したり、
碎岩面積 七二九五、三三三

碎岩立積

五、二八四、五七九
四、八〇七一〇〇
〇、九一〇

一坪當工費

埋立工事 埋立地高は大潮干潮平均面上十二尺にして舊第五號埋立地を除く外は周圍より中央に向ひて六百分の一上り勾配に地均しを施したり

土砂は主として二隻の唧筒式浚渫機資田號及業平號により埋立て尙土運船より直接埋立地内に放捨又は陸揚をなしたり。

唧筒機埋立作業は豫め埋立地周圍に假土留柵又は木造護岸を施工し其附近適當の個所を選ひて唧筒式浚渫機の操業所を設け此處に一定の小區域を限りて浚渫土砂を運送放捨し海水と共に唧筒機にて土砂を吸收排泥管を以て埋立闇内に排出し周圍の一端を開放して清水を排出するにあり。

埋立の初期にありては飛鳥型曳船及十坪積側開土運船の淺吃水と及満潮時とを利用し出來得る限り積載土砂を直接埋立區域内に放捨し以て埋立費の節約を計りたり之を鋼土放捨と云ふ。

二坪積土運船積載土砂殊に堅層土砂は主として埋立周圍より人力を以て擔揚又は列付により護岸裏込又は唧筒機埋立の堤防用に使用し其他普通土砂は満潮時を利用し埋立區域内に放捨したり是等を總稱して人力陸揚と云ふ其他時宜により唧筒機に供給せしこともありたり埋立地に關する諸要項及處分別埋立土量左表の如し。

埋立地別諸要表

埋立地	位位置	町名	埋立土量	浚工面積	竣工年月日	摘要	要
舊第五號	南濱町西面地先	新芝町	五〇、七〇四	六七〇	一七、五九八	明治四五、七、二四	同四五、四、二八
						總面積三二、四七五、一八	二ノセ殘第一期工、施工

第一號	日ノ出町南面地	一二四、二六四	六六二	四二、五二二	八三〇	大正	四五、三、七
第二號	南濱町南面地先	一〇五、〇五八	六九六	三三、一二四	〇五〇	明治四、二	二〇
第三號	新芝町西南面地先	七二、七四五	四〇一	二六、三四六	一一〇	明治四五、四、二	九
第四號	第五號埋立地東 新芝町西南面地	一六六、六九二	四一九	五九、一二一	七九〇	大正四五、四、二	九
第五號	第六號 新芝町西南面地	八五、三二二	四一五	三〇、〇四五	七八〇	明治四五、四、二	九
第六號	第四號埋立地東 新芝町西南面地	五三、一七二	二二四	二七、九七八	五六二	同	三二、六、一九
計	六五七、九六〇	四一二	二〇八、七五九	五〇四	二二七	四八、一五	三二、六、一九
			五六六	二二二		出来形約五分三厘	

處分別埋立土量表

埋立地		唧筒機	埋立土	砂	處	分	別
舊	第一號	四七、八七五	四八三	○	二、八二九	一八七	計
第六號	七六、〇七九	九二、九八四	九三八	一〇、八七〇	二〇六	二〇、四〇九	六七〇
第五號	一二五、八三九	一二四	三六〇	一一、六二七	九八四	五一、七五八	六六二
第四號	五二、二五〇	四〇七	三〇〇	六、六二三	二二二	一三、八七一	六九六
第三號	七七、六七二	七七、六七二	三六〇	一一、六二七	九八四	五一、七五八	六九六
第二號	一二五、八三九	一二四	三六〇	一一、六二七	九八四	五一、七五八	六九六
第一號	二四、〇五五	〇二〇	二一、一五〇	九五二	七、九六六	七二、七四五	四一五
計	四九六、七五六	六三二	六六、三五二	七八二	九四、八五二	九九八	六五七、九六〇

備考 埋立土砂の内人力陸揚に於て一三、一六四、〇二九立坪及七二〇、九五七立坪は市内河川浚渫土砂委託浚渫土砂等なり。

以上埋立作業に要せし工費左の如し。

土砂陸揚費(唧筒機運轉費共)

土砂移動及引均並に諸雜費

計

一六六、四七、九二二

九三、一、一六、九四三

三五九、六八、八八六五

○五五八

陸揚土砂一坪當工費

但し市内河川其他よりの供給土砂一三、一六四、立坪〇二九は陸揚費を要せざりしを以て坪當工費計算に算入せず。

浚渫埋立工事用諸船艇の成績 浚渫埋立工事用諸船艇は前第壹期工事以來使用せしものにして第二期工事に於て購入せしは單に新造十坪積鋼製土運船二隻及二坪積木造土運船三十四隻の古船のみにして是等の内重なるものに付き成績を調査し左に表示することせり。

千 第 代 田 號 三	同	同	同	同	同	同	同	同	船 名	獎 勵 金 支 付 せ る 分 額	期 間	獎 勵 金 支 付 な き 分 額	摘要欄
									駒 形 丸				
千 第 代 田 號 二	同	同	同	同	同	同	同	同	至 自 明 治 正 四 十 四 年 五 月 七 日	〇、 三〇七	一坪當り作 業費 元	一坪當り作 業費 元	摘要欄第一期工事のもの参照
〇、 五五四	同	〇、 五四三	〇、 六一	〇、 四一〇	同	同	同	同	至 自 大 正 三 年 六 月 十二 日	〇、 五七四	一坪當り作 業費 元	一坪當り作 業費 元	摘要欄第一期工事のもの参照
〇、 四一〇	同	一、 六九五	〇、 七〇六	〇、 七六一	同	同	同	同	總 走 船 其 他 概 括 數 百 六 九 噸 二 一				

寶田號	同	○、四九九	同	○、六四〇	同
碎岩機	同	○、四六六	同	○、六五一	同
飛鳥丸	至明治四十四年七月 自明治四十四年七月 至大正三年五月	○、二一一 ○、三四七	自大正三年十二月 至大正三年六月	一、一八三 ○、四七四	大藏省臨時建築部横濱支部より借入 船とす双輪車式鋼製曳船總噸數七一、三五を有する蒸汽
綾瀬丸	同	○、三四一	同	○、五五九	同 上
宮戸丸	同	○、三四三	同	○、四〇五	同 上
羽田丸	同	○、三〇〇	同	○、六一一	同 上
黒田丸	同	○、三四一	同	○、四二九	單輪車式木製曳船總噸數七〇、九五を有する蒸汽 船とす
待乳丸	同	○、二六〇	同	○、四一九	同 上
小梅丸	同	一	木製一、五立坪積土運船とす		
自一號木製船 至六號運船 自一號發銅製船 至五十一號同	同	○、一七〇	木製二、五立坪積土運船にて内三十四隻は第二期工事 費を以て購入		
	○、六七九	同	木製二、五立坪積土運船とす		
	○、九〇一	同	木製二、五立坪積土運船にて内三十四隻は第二期工事 費を以て古船購入		
		二、〇八五			

備考

碎岩機船には獎勵金を一切交付せず 又大正三年五月より同年十二月に至る間は千代田即

ちブリーストマン式浚渫機を改造し重量三噸を有する「スバット」を附し代用せしものゝ成績とす。

護岸及物揚護岸工事 埋立地の臨海面は總て木造板柵護岸及木造物揚場護岸を以て圍らせり。

護岸の内風浪に曝露せる部分及三十間運河に面せる大部分は二段板柵護岸にして下段干潮面上十
二尺下段同六尺三寸巾三尺五寸の小段を存す其他は總て顛端同十二尺の一段板柵なりとす。

物揚場護岸は頸端干潮面上八尺の木造一段板柵護岸上に勾配九分の一乃至十分の一の斜面を造り
内二間通り龜腹石張となしたり。

護岸及物揚場共海水に接する部分は柵板柵杭等總て板材に一立方尺三升の防腐劑クレヲソート油
を注入したり。

以上工事は總て直營を以て施工明治四十四年九月七日舊第五號埋立地護岸より起工し大正五年十
二月十五日第六號埋立地護岸を以て竣れり其延長工費等左表の如し。

埋立地別護岸及物揚場護岸延長表

工種	埋立地別	護岸長(間)						
	舊第五號	第一號	第二號	第三號	第四號	第五號	第六號	計
一段柵木造護岸								
二段柵同	四七六、〇	六九七、二	三八八、三	一〇三、五	五一四、三	一〇五、三	七七〇、九	三、〇五五、五
木造物揚場護岸	二二、一	三〇、四	七三、〇	六八、七	二〇、〇			二二三、三
計	四九七、一	八四二、〇	八一八、六	七〇五、五	九六九、七	四七〇、三	七七〇、九	五、〇七四、一

外に舊第四號埋立地北面船溜沿護岸長五十間を物揚場に改築す。

護岸及物揚場護岸工費

工種	延長(間)	工費	間當工費	摘要	要
一段柵木造護岸	一、八〇五、四	六二、六六四 <small>円</small>	三四	七〇九	
二段柵同	三、〇五五、五	一九六			
一段柵同上	二四二、八八九	一七四			
護岸補強工事	三、五八一	五九〇	四六七六五		

工學會誌 第一四〇卷

假土留工事 假土留工は唧筒機埋立工事の爲め埋立地周圍に施工したる極めて簡単なる板樋工にして工期の關係上護岸の施行を待つを得ざりし場合又は地盤の軟弱なる場合に施工したるものなり其構造は傾端干潮面上七尺に松丸太杭に松六分板を打付け専縫を張付けたるものとす本工事は總て直營を以て施工明治四十五年四月十六日を以て着手大正五年三月三十日竣工せり其延長工費等左表に示すか如し。

埋立地別假土留延長表

工種	構造	埋立地別假土留延長(間)						摘要
		第一號	第二號	第三號	第四號	第五號	第六號	
假土留	舊第五號	一、〇七〇	一、〇七〇	五四〇	八六六	八五〇	七七〇	
木	土炭岩造	一	一、〇七〇	三〇〇	六五五	一	一	
造	計	一四二、〇	九九五	八七六	八三〇	五七〇	八三〇	

以上の假土留工事に要せし工費は次表の如し假土留の構造は巻尾附圖第五圖参照)

工種	延長	工費	間當平均工費	摘要	要
木造	四、〇〇〇、六	一四、九六一 五〇〇	三七四〇	外に古材使用見込額 六一八、六一〇	

橋梁工事 橋梁は其始め十四個に於て架設の計畫なりしも八橋を架設したるのみにして他は四橋の事情により中止することゝせり。

橋梁の構造は凡て木造桁橋にして鹿島橋に鐵筋混疑土造橋臺を入江橋に木造橋臺を築造したる外總て木柵護岸を利用して單に支杭のみを打込むに止めたり其施工位置等詳細左表に明なり。

二藻鹽橋	新芝橋	第入江橋	鹿島橋	橋名	竣工年月日	位置	橋長
大正四年四月三十日	大正三年十月卅一日	大正三年一月卅一日半	大正三年一月卅一日	大正三年一月卅一日	大正三年一月卅一日	東部	五號地間
斜七部號地及第五度の三號地間新第號	舊第五號地及新第號	舊第四號地及舊第五號地間	舊第四號	橋員間	橋員間	橋員間	橋員間
一八	一七	三六	五二〇	一九四〇四九八	一九四〇四九八	一九四〇四九八	一九四〇四九八
三三三三七三	○六〇	三四	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇	一六〇
一六、〇	一六、〇	一四、五	圓弧	圓弧	圓弧	圓弧	圓弧
三分寸尺二分三寸四	百尺六尺四	一尺五寸尺	三二寸七尺	三寸九寸	百二十尺	百二十尺	百二十尺
同同同	同同同	同同同	同同同	同同同	同同同	橋體	橋體
米檜	米松	米松	米松	米松	米松	橋脚	橋脚
太杭	注入松丸	注入松丸	注入松丸	注入松丸	注入松丸	橋臺	橋臺
杭打	在來護岸板構内に支杭とし	在來護岸板構内に支杭とし	在來護岸板構内に支杭とし	在來護岸板構内に支杭とし	在來護岸板構内に支杭とし	壁式	壁式
○、五	一〇〇	○、五	一〇〇	○、五	一〇〇	每平方尺等布荷重(井)	每平方尺等布荷重(井)
五三九三	四二〇〇	四一六五	三〇七五	一五、四五	一〇〇	計算耐力(井)	計算耐力(井)
七五	八二	二七	一五	一五	一五	坪當工費	坪當工費
六外古材使用四	六外古材使用一負工	直營大用	同地による	直營	別に詳説す	橋面備考	橋面備考

土炭岩造計	七四〇、五	三、二三五	三四〇
四、七四一、一	一八、一九六	八四〇	一〇
一八、一九六	八四〇	三八三八	四三六九
三八三八	四三六九	外に古材使用見込額	六八四六一〇
三八三八	四三六九	外に古材使用見込額	六八四六一〇

假設工事 假設工事中の重なるものは月島第二號地より芝浦日出町へ機械工場を移轉し且つ其擴張を行ひしものにして其他一廉五百圓以上の工事を一括して列舉すれば次表の如し。

工種		施工位置	數量	工費	單位當工費	摘要	要
同	木造導流柵	左右	左右	一〇、〇七三八四六	一〇、〇七三八四六	一	一
岸	岸	岸	岸	三九二八〇〇四			
同	木造導流柵	一、六九五三五七	二九、三八二一九四	二二六〇二四	同大正三、四三、四四、三一	十四廉	直營
同	木造導流柵	一、九七	同	同	同	同	同
同	木造導流柵	四、八、三一	同	同	同	同	同

導流柵 導流柵は砲臺外新航路の左右両岸に施工したものにして將來築港工事に伴ひ航路の擴張を慮り兩岸導流柵の間隔を二百間としたり右岸導流柵の構造は木造にして頭端高干潮面上五尺に松丸太並杭を二列に打込み胴材を取付け總て防腐剤クレヲソート油を注入したるものなり柵の中間は四個所を切斷し柵の内外に於ける船舶の通路となし其兩側に擋標を設けたり左岸導流柵の一部は右岸同様の木造にして大部分は鐵筋混泥土造矢板杭を頭端高干潮面上五尺となし二列に打立て防腐剤注入松角材を以て胴材とし土炭岩を以て根固めとなしたるものなり左岸柵全長に亘りて七個所の通路を存し其兩側に擋標を設置したり。

本工事は總て直營を以て施工其延長工費等左表の如し。

職工手洗場及寫眞室新築工事	同	二十四坪	五一六〇〇〇	二二五〇〇	四五五、三一、一五	同
倉庫新築工事	同	三十二坪	一、一六八〇〇〇	三六	五〇〇〇	四五五、三一、一五
第二期工事機械工場所屬上工場移轉並に一部改築工事	同	六十坪	五八八〇〇〇	五八〇〇	四五五、四一、一五	同
亞鉛板塀及門扉新設工事	同	擴長二〇四間四門	〇〇〇〇	一	同	同
砲臺外導航人小屋新築外三工事	同	擴長二五七坪	百建坪六十七坪擴長	一	同	同
倉庫兼舊機械工場此掛工事	同	八三三〇〇〇	八三三〇〇〇	一	同	同
機械工場外三工事	同	一、七五三	一	一	同	同
計		一〇、〇七三八四六	一〇、〇七三八四六	一	同	同
					大正三、一九、三〇六	營
					十四廉	直營
					請負營	同

論說及報告

		鐵筋混凝土造導流柵		道路築造工事		道路は第一第二期埋立地の大部分に亘り其多くは主要道路の地均しをなし汽力又は人力ローラーを以て敷き固めをなすに止め第一期埋立地の一部に對してのみ砂利を散布したり工事は總て直營を以て施工し大正四年七月一日を以て着手同五年十一月十五日を以て工を竣れり其内容次の如し。	
		同	滬	標	同	左岸	七二四
		計				六	四二、四一四
						五八三	五六五
						弱同	五八
						同	五八
						三〇	三六五
						同	三〇
						四、一〇、三〇	四、一〇
						同	三、一〇、三〇
						上	型枠費を含む
舊第三、第四號		埋立地別	面積(坪)	工費	面一坪當平均費	摘要	要
舊 第 二 號	八、一七二四〇	四六六	九一六	○五七 強	地均		
舊 第 三 號	一、九四二七七	一〇九	九六八	○五七 強	同		
舊 第 四 號	六、八一七三〇	三八九	四九四	○五七 強	同		
舊 第 五 號	四、二九五七七	四〇二	〇七一	○七四 弱	同		
第 一 號	一二、一八四六七	九一八	五四〇	○七五 強	同		
第 二 號	八、四二七六六	五八一	三三二〇	○六九 弱	同		
第 三 號	八、三四〇一七	六四九	八六八	○七八 弱	同		
第 五 號	四、四二四五三	二一六	四三〇	○四九 弱	同		
計	五四、五八七二六	三、七三四	六〇七	○六八 強	同		
舊 第 三、第四號	四、九一五九三	一、五四〇六四二		砂利布均			
				三一三強			

合計	四、九一五九三	一、五四〇六四二	一三一三強
五九、五〇三一九	五、二七五二四九	一	一

下水築造工事 下水は舊第二、第三、第四號地の主要道路の兩側に添ひ施工せり、凡て木造にして請負事業とし大正四年十月九日を以て着手同五年二月九日竣工せり其内容次の如し。

埋立地別	延長(間)	工費	工間當平均費	摘要	要請負人
舊第二號	一、四五二、〇	四、七四二八三〇	三二六六強		
舊第三號	三一六、五	八五〇〇〇〇〇	二六八六弱	同	藤代徳太郎
舊第四號	一、一八三、二	四、〇〇八七五五	三三八八強	同	中島金太郎
計	二、九五一、七	九、六〇二五八五	三二五三弱	延長の内に吐口鉄管等を含む	

其他の雜工事 以上記載したる以外の難工事にして一廉五百圓以上の工事を一括列舉せは次の如し。

工種	数量	工費	單位當工費	竣工年月日	摘要	要
隅田川口改貯第二期工事	百三十一間	七八六九一五	六、〇〇〇七	明治四四、一〇、一五七		
事務所周圍亞鉛塗工事						
同上機械工場機械移轉基盤工事及 第一號第二號起重機建設諸工事						
同上機械工場所屬船渠移轉改築並 に土留渠護岸改造工事						
同上機械工場基礎工事	外六ヶ所	貫孔及切斷機基礎	一	大正元、一〇、一四五、一五七	請負人 大西茂一郎	營業
同上機械工場	五八〇六八〇	二、五三一七七四	直	明治四五、二、一五七	同	
同上機械工場	一、九八三八一八	間に付		大正元、一〇、一四五、一五七	同	
同上機械工場	一一〇四強			明治四五、二、一五七	同	
同上機械工場	二、一二八、一〇六			大正元、一〇、一四五、一五七	同	
同上機械工場	同	同	直	大正元、一〇、一四五、一五七	同	

同上 第一號埋立地東面 防衛杭工事	九十一ヶ所	一、一二〇五四二 二二、三一四弱	同
芝浦埋立地内堀井戸新設工事	一、五六七尺	一、五一六九九〇 九六八強	同同
結所標内外其他矢來設置工事	一二、一七四四三七	一二、一六三二七 七一八	三、二、二二、二四 六十七尺一個所千二百尺 請負人内藤德藏一個所三百
計	一	一	五二十二廉 請直營

第四章 結論

我が東京市は以上概設せし如く第壹期第貳期の貳大工事を起し工費に於て四百五十余萬圓工期に於て約十ヶ年の犠牲を堵し隅田川に拂ひし努力の結果は能く航路を埋め土砂壹百拾壹萬二千余坪を排除し之が爲め永代橋下流に屬する濬筋は延長五千四十間に涉り幅員七十間乃至百間水深大潮干潮面以下拾貳尺を維持し猶ほ且つ副産物として參拾有餘萬坪の水運至便なる埋立地を航路の近くに得、横濱品川河内荷役を合せ舟並に小汽帆船の齋らす一ヶ年四百拾七萬噸(大正四年度調査)の呑吐貨物は此の新航路の築造により河口に於ける一大難關を除かれ水運改善の第一步を進むるを得しは吾人の窃かに欣然たるものなきにあらず然れども隅田川口の位置地勢より見て内外貿易の趨勢並に使用船舶の寸法より考へ更に本施設を顧るとき吾人の希望に伴はざる實に忸怩たらざる能はざるものあるは前章第壹節に於て既に記述盡せし如きを以て更に繰返す必要たになきを知るも尙ほ消費者生産者として本市の蒙る時間、運賃其他に基く莫大なる損失に思ひを致す時は猶ほ且つ隔靴搔痒の感なき能はず。

一般根本的水運整理に關する私案は何れ築港設計と關聯し今後發表諸家の御指導を請ふ時期あるべきを以て是れには只此序を以て隅田川的主要航路は如何なる水深を要し如何なる範圍に及ぼすを適度となすか是れ河口改良上常に考慮さるべき處にして且つ同時に學者若しくは利用者の等しく研

究に價すへき問題にして吾人は又其御指導に俟つもの多かるへく信するを以て一言是等に關する吾人の希望を陳へ本稿を擱筆せんとす、現時の如く川沿護岸地帶は亂用され水運に無交渉のもの之れに據り或は地價甚だしく嵩み地目變換容易ならざる時代に於ては地勢地形に根據する根本整理は犠牲餘りに大にして情實纏綿其實行期し難きを以て吾人の計畫は現時に於ける隅田川の位置地形を出来る丈け利用し交通運輸組織を考ふると同時に新計畫は更に來るへき新東京の區劃、地格を考慮するにあり即ち再言すれば現在市區の製造商業居住地帶を顧み利用し其の連絡を確實になす外來るへき新東京の其等に充分配慮し時勢の進行に伴ふ新舊移動の大勢に備ふる準備なからへからず幸ひ本市の各地帶は地形地勢に基き偶然にも整然たるものあるは第壹章第參節に於て概説せし如きを以て此地勢の利用する施設は自然の要求する處人意を以て變改をなすこと容易ならされば之を經とし運輸交通機關改善の方針を考ふるときは之に對する幹線は隅田川にして主要倉庫地帶は永代橋附近より新大橋に至る本川の兩岸若くは其派川の兩岸にあるは卷尾の略圖より容易に之を看取し得るを以て之に對する完全なる水運網を形成するは水運改善の一骨子なるへし且つ是等の位置は將來築港完成し築港地帶に貨物倉庫の築造成り最も經濟的に荷揚けなし得る時期に至るもかゝる地帶に於ける倉敷料金は長期貯藏を許さるものあるを以て倉敷料比較的低廉なる貯藏倉庫の必要を喚起すへく是に對し現在の倉庫地帶は大抵に於て水運の便利を最も強度に享受し得る適切なる位置にあれは其利用の持續を見るは明かなり、隨て隅田川及其派川の改修方針は築港設計の如何に關らす現在の倉庫地帶に最も經濟的に貨物を輸送する相當施設を要するなるへし、次に吾人は將來東京市は如何なる地域に發展するか否東京市の產業經濟的勢力範圍は如何なる地域に及ぼすへきものなるか即ち運輸交通の起着點は如何なる位置に選ぶを要するかを考ふるに現在に於ける都市は産業經濟の命する儘隨時適宜に進展し衰頽も發展も一に是れか可否に答ふる現象にして只歴史は僅かに之を支持しつゝあるか

月十年六正大

如きも其大勢は挽回し得へくもあらず故に水運改善の骨子の一は吾人は具體的指摘を憚る處なるも此の新機運に對する設備ならざる可らず、範圍に對する概念は以上の如くとせば次に吾人の研究をするは所要水深幾尺を要するやに就いてなるへし是れに關し先づ當業者の希望を聞くに日本船主同盟會本市の諮詢に答ふらく『水深大潮干潮面下貳拾尺以上の維持するにあらざれば本會加盟船舶を入港せしむるに由なし』と之れを以て見るも貳拾尺以上の水深必要なり、又第十二回萬國海事會議(Twelfth Nav. Cong.)の報告より『グラスゴー』なる英國管船組合の技師長、フホスター、キンギ氏の作りし貨物船の主要寸法曲線に依るときは最渡貨物船の吃水は十呎乃至二十八呎にして千九百年以後のものは十呎乃至二十八呎特に二十三四呎のもの最も多きか如し長さは百五十呎乃至四百九十呎にして千九百年後は二百五十呎乃至四百九十九呎内最も多きは三百七十呎前後、又幅員は十五呎乃至六十二呎千九百年後は三十一呎乃至六十二呎にして其内最多きは五十呎前後のものゝ如し)。

「スエズ」運河は千九百十四年後よりは三十三呎の水深にして二十九呎の吃水を有する船の通航を許容しつゝあるも、若し千九百十二年の決定設計にして實施さるゝに於ては水深十二米突即ち三十三呎の吃水を有する船の通航をされることを得へし。

「バナマ」運河は最低水位に於て三十五呎の水深を有す出入口に於て平均水位以上の時を選ふに於ては能く四十五呎の水深を有するを以て最低水位に於ては三十一呎、平均水位以上に於ては四十一呎の吃水を有する船の通航に可能なるへし。

以上は一般造船及航路に於ける制限の大槻を摘要したるに過ぎざるも是れにより貨物船の吃水に關する大勢を推知するに難からず而して翻つて本邦特に横濱に出入する内外貿易船を見るに卷尾附屬の参考表に明かなる如く貨物船にありては吃水二十五呎を脱するもの少數にして更に品川沖荷役のものゝ如き二十五呎三寸のもの一艘あるのみなるも以上の既知條件及び通商の要路に横はる各商

港の共通深水を吟味し我が隅田川に於ける水深を定むるときは少くとも二十五呎乃至二十七呎の水深を維持するにあらざれば充分なる經濟的價値を發揮するに至らざるへし、若し隅田川の改善にして充分なる經濟的價値を具體的に示す時期ありとせばそは當然東京築港を現實にするの更に必要を感知する時なるは吾人の疑はざる所なり、只現在に於ける舟業者に對するの善後策を充分考慮するにあらざれば水運改善上意外の故障なきにあらざるへし囁々。

又沿岸施設に對しては土地の所有者若くは利用者の便宜に委するも大なる故障あらざるへし、吾人は本稿を終結するに當り浚渫埋立作業上より得し經驗に付き一言する必要なきにあらざるも事枝葉微細に屬するを以て一般的の記述は之を止め卷尾に工事施行中に適用せし主要諸規程及示法書特に浚渫船及び曳船並に土運船の示方書及圖面を附し参考に供すること、せり唯次に記する數項は此種の工事施行者に於て特に注意を要することなるへしと信し附記せり。

假謹岸の堀久力(防腐剤注入)は「テレド」其他の海蟲の爲めに侵害を受くるものは普通堀久年限内のものと雖とも毀損甚しきものあるも然らざるものは六年半乃至八年間支持し得るか如し、「テレド」蟲は河底地下二尺前後の下部より上部は水面の附近に及び浸蝕す芝浦附近にありては外海に面するもの程慘禍を蒙り之れか堀久力は檜素材より松の注薬材は一層支持力を有するものゝ如し。

又埋立地の沈下は能く注意を拂ひしものと雖とも河底並に埋立土の沈定の爲め埋立後數年間は年年埋立深さの一%乃至二%の沈下を有するが如し勿論之等の數字は地質及工法並に作業の精疎の程度に準據すへきものなるを以て吾人の提言は吾人の探知せし一例に過ぎざるも記して以て計劃者の参考に供す。

終りに臨み本工事關係諸員の勞を謝し併せて本稿は是等諸君の記録若くは報告に基き編輯し本誌に記載するを得しは生の光榮とする處茲に記して以て謝意を表す。

附

論說及報告

七九六

貨物船ノ曲線 參業
東京輸出入海運貨物及船舶統計表目錄
主要工事諸規程及材料ニ關スル示方書

附圖
圖面

東京輸出入海運貨物及船舶統計表目錄

日録

一、横濱港ニ於ケル外國貿易貨物輸出入噸數調査表

二、横濱港ニ於ケル内國貿易貨物輸出入噸數調査表

三、東京内國貿易外國貿易貨物輸出入貨物噸數表

四、横濱港外國貿易船入港表

五、横濱港内國貿易船入港表

六、横濱港内外國貿易船入港總計表

七、東京河内井品川入津船舶調査表

八、横濱入港最大船舶表

是等ノ諸表ハモトテ港調查ノ必要ヨリ調製セシモノナルモ開田川口ニ船舶ノ出入ヲ便ナフシムルコトハ改良工事ノ目的ニシテ港ト同ナルノミナラズ位置其他大抵ニ於テ差違ナキヲ認メ特ニ本表ヲ察ミテ本工事ノ價值ヲ明カニセントス

橫濱港ニ於ケル外國貿易輸出入噸數調查表

年次	名稱	輸		出		合	水路東京輸出入貨物計	横濱港輸出貨物	横濱港輸出貨物計
		東京ヨリ輸入來航	上屋經由高	東京ヨリ來航且横濱	合				
三十一年	二本船ヘ積移高	九五、一六三	九五、一六三	九五、一六三	九五、一六三				
三十一年	五十、三四八	五一、三四八	五一、三四八	五一、三四八	五一、三四八				
三十一年	五二、六九五	一三九、四六八	一三九、四六八	一三九、四六八	一三九、四六八				
三十一年	一四六、五一	一四六、五一	一四六、五一	一四六、五一	一四六、五一				
三十一年	一九、八二三	一二二、九五四	一二二、九五四	一二二、九五四	一二二、九五四				
三十一年	二六六、三四四	二六六、三四四	二六六、三四四	二六六、三四四	二六六、三四四				

三十 六年 年次	名稱 年 平 均	三 十六 年 年 平 均	三十 七年 年 平 均	三十 八年 年 平 均	三十 九年 年 平 均	三十 十年 年 平 均	三十 一年 年 平 均	三十 二年 年 平 均	三十 三年 年 平 均	三十 四年 年 平 均	三十 五年 年 平 均	三十 六年 年 平 均	三十 七年 年 平 均	三十 八年 年 平 均	三十 九年 年 平 均	三十 十年 年 平 均	三十 一年 年 平 均	三十 二年 年 平 均	三十 三年 年 平 均	三十 四年 年 平 均	三十 五年 年 平 均	三十 六年 年 平 均	
水路東京輸出入貨物		總計		輪船高麗 本國ヨリ解取ノ儘東京		輸入		橫濱高麗 京輪船揚更ニ解ニテ東		輸入		水路東京輸入貨物		合計		水路東京輸入貨物		橫濱港輸入貨物		橫濱港輸入貨物		橫濱港輸入貨物	
一、一〇一、一五五	四二五、三四〇	四二三、三五八	八四八、六九八	九五四、六四四	二三四、三三五	二〇八、九六六	一、一六三、六一〇	一、一七四、九七二	一、一〇一、三七九	一、一六三、七二一	一、一七四、三〇七	一、一九九、五三〇	一三四、三五九	三三三、八七九	三三三、八七九	一、一〇一、三七九	一、一八四、〇七八	一、一九九、五三〇	一、一八四、〇七八	一、一九九、五三〇	一、一九九、五三〇	一、一九九、五三〇	一、一九九、五三〇
三二八、七七九	横濱但シ水路東京輸出入貨物 除ク	二九四、九五九	一、一四三、六五七	一、一〇九、七一四	一、一三五、九五〇	一、一三五、九五〇	一、一〇九、七一四	一、一三五、九五〇	一、一〇九、七一四	一、一三五、九五〇	一、一〇九、七一四												
一、四二九、九三四	橫濱港輸出入貨物 總計	一、一四三、六五七	三四五、三八五	三七〇、七七一	三六三、七六九	三六三、七六九	三七〇、七七一	三七〇、七七一	三九五、一三六	一、一三五、九五〇													

本表ハ過クル八年間横濱港ニ於テ積出高ヲ爲セル内國貿易貨物ノ噸數統計ヲ示スモノニシテ其内水路ニ依リ東京ニ輸出入人シタル貨物ノ一ヶ年平均ハ同港輸出入全體ノ一ヶ年平均ニ對シ輸出高ニ於テハ其六割ヲ分強ナ占メ輸入ニ於テハ其七割二分強ナ占ム其他本表中横濱輸出若クハ横濱輸入欄内ノ荷物ニシテ別途解便ニ依リテ東京ヨリ又ヘ東京へ輸送セラレタルモノ其數尠ナカラサル可シ

一ヶ年平均	年次	名稱	横濱港ニ於ケル内國貿易貨物輸出入噸數調査表			一ヶ年平均	横濱港ニ於ケル内國貿易貨物輸出入噸數調査表		
			輸	出	入		輸	出	入
一一〇、四五五	三十六年	本船仕向高 東京ヨリ來航	一〇〇、〇三三	一〇〇、〇三三	一一〇、一〇九	一一〇、〇五四	九一八、八六二	一一〇、一〇九	一一〇、一〇九
一一一、〇四四	三十七年	三六、八零	一〇〇、〇三三	一〇〇、〇三三	一一〇、一〇九	一一一、〇四四	一、二三六、九五六	一一一、〇四四	一一一、〇四四
一一二、〇三三	三十八年	三六、八〇八	一〇〇、〇三三	一〇〇、〇三三	一一〇、一〇九	一一二、〇三三	一、〇二二、一二八	一一二、〇三三	一一二、〇三三
一一三、〇二二	三十九年	三六、八〇八	一〇〇、〇三三	一〇〇、〇三三	一一〇、一〇九	一一三、〇二二	一、一一八、四一〇	一一三、〇二二	一一三、〇二二
一一四、〇一一	四十一年	三六、八〇八	一〇〇、〇三三	一〇〇、〇三三	一一〇、一〇九	一一四、〇一一	一、一六、〇三三	一一四、〇一一	一一四、〇一一
一一五、〇〇〇	四十二年	三六、八〇八	一〇〇、〇三三	一〇〇、〇三三	一一〇、一〇九	一一五、〇〇〇	一、〇六一、七七九	一一五、〇〇〇	一一五、〇〇〇
一一六、〇八九	四十三年	三六、八〇八	一〇〇、〇三三	一〇〇、〇三三	一一〇、一〇九	一一六、〇八九	一、〇五九、一七九	一一六、〇八九	一一六、〇八九
一一七、〇七八	四十四年	三六、八〇八	一〇〇、〇三三	一〇〇、〇三三	一一〇、一〇九	一一七、〇七八	一、一〇八〇、五五四	一一七、〇七八	一一七、〇七八
一一八、〇六七	四十五年	三六、八〇八	一〇〇、〇三三	一〇〇、〇三三	一一〇、一〇九	一一八、〇六七	一、二七六、一五一	一一八、〇六七	一一八、〇六七
一一九、〇五六	四十六年	三六、八〇八	一〇〇、〇三三	一〇〇、〇三三	一一〇、一〇九	一一九、〇五六	一、五六八、六〇〇	一一九、〇五六	一一九、〇五六
一一〇、〇四五	四七年	三六、八〇八	一〇〇、〇三三	一〇〇、〇三三	一一〇、一〇九	一一〇、〇四五	一、三七六、二三四	一一〇、〇四五	一一〇、〇四五
一一一、〇三四	四八年	三六、八〇八	一〇〇、〇三三	一〇〇、〇三三	一一〇、一〇九	一一一、〇三四	一、七四六、二二九	一一一、〇三四	一一一、〇三四
一一二、〇二三	四九年	三六、八〇八	一〇〇、〇三三	一〇〇、〇三三	一一〇、一〇九	一一二、〇二三	一、七四五、九六五	一一二、〇二三	一一二、〇二三
一一三、〇一二	五〇年	三六、八〇八	一〇〇、〇三三	一〇〇、〇三三	一一〇、一〇九	一一三、〇一二	五七五、六〇六	一一三、〇一二	一一三、〇一二
一一四、〇〇一	五一年	三六、八〇八	一〇〇、〇三三	一〇〇、〇三三	一一〇、一〇九	一一四、〇〇一	一、六三七、三八五	一一四、〇〇一	一一四、〇〇一
一一五、〇〇〇	五二年	三六、八〇八	一〇〇、〇三三	一〇〇、〇三三	一一〇、一〇九	一一五、〇〇〇	一、六二三、三九〇	一一五、〇〇〇	一一五、〇〇〇
一一六、〇八九	五三年	三六、八〇八	一〇〇、〇三三	一〇〇、〇三三	一一〇、一〇九	一一六、〇八九	三五七、二八九	一一六、〇八九	一一六、〇八九
一一七、〇七八	五四年	三六、八〇八	一〇〇、〇三三	一〇〇、〇三三	一一〇、一〇九	一一七、〇七八	三三一、六四四	一一七、〇七八	一一七、〇七八
一一八、〇六七	五五年	三六、八〇八	一〇〇、〇三三	一〇〇、〇三三	一一〇、一〇九	一一八、〇六七	三五四、一〇六	一一八、〇六七	一一八、〇六七
一一九、〇五六	五六年	三六、八〇八	一〇〇、〇三三	一〇〇、〇三三	一一〇、一〇九	一一九、〇五六	六一七、八一九	一一九、〇五六	一一九、〇五六
一一〇、〇四五	五七年	三六、八〇八	一〇〇、〇三三	一〇〇、〇三三	一一〇、一〇九	一一〇、〇四五	六二九、九三二	一一〇、〇四五	一一〇、〇四五
一一一、〇三四	五八年	三六、八〇八	一〇〇、〇三三	一〇〇、〇三三	一一〇、一〇九	一一一、〇三四	五七五、六〇六	一一一、〇三四	一一一、〇三四
一一二、〇二三	五九年	三六、八〇八	一〇〇、〇三三	一〇〇、〇三三	一一〇、一〇九	一一二、〇二三	一、六三七、三八五	一一二、〇二三	一一二、〇二三
一一三、〇一二	六〇年	三六、八〇八	一〇〇、〇三三	一〇〇、〇三三	一一〇、一〇九	一一三、〇一二	一、五五〇、四八五	一一三、〇一二	一一三、〇一二

		横濱港外國貿易船入港表		本表ノ噸數ハ登簿噸數ニ依リ、一回ノ入港ヲ以テ一艘ト算ス			
三十六年	四〇	日 本 船		航 舶		合 計	
		艘	數	艘	數		
千噸以下	艘	艘	數	艘	數	艘	
一千噸以上	艘	艘	數	艘	數	艘	
三千噸以上	艘	艘	數	艘	數	艘	
六千噸以上	艘	艘	數	艘	數	艘	
二萬噸以上	艘	艘	數	艘	數	艘	
三十六年	一	一	一	一	一	一	
三十七年	一	一	一	一	一	一	
三十八年	一	一	一	一	一	一	
三十九年	一	一	一	一	一	一	
四十一年	一	一	一	一	一	一	
四十二年	一	一	一	一	一	一	
四十三年	一	一	一	一	一	一	
四十四年	一	一	一	一	一	一	
四十五年	一	一	一	一	一	一	
四十六年	一	一	一	一	一	一	
四十七年	一	一	一	一	一	一	
四十八年	一	一	一	一	一	一	
四十九年	一	一	一	一	一	一	
三十一年平均	一	一	一	一	一	一	
一ヶ年平均	一	一	一	一	一	一	

	一千噸以下 艘	一千噸以上 艘	三千噸以上 艘	六千噸以上 艘	計 船	總 船					合 計
						千噸以下 艘	千噸以上 艘	三千噸以上 艘	六千噸以上 艘	計 船	
四十一 年	七、三 五	六、九 三	五、七 二	三、七 一	二、三 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	三、一 一
四十 年	七、一 三	六、七 一	五、七 一	三、七 一	二、三 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	三、一 一
三十九 年	七、一 三	六、七 一	五、七 一	三、七 一	二、三 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	三、一 一
三十八 年	七、一 三	六、七 一	五、七 一	三、七 一	二、三 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	三、一 一
三十六 年	六、八 二	六、八 二	五、七 一	三、七 一	二、三 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	三、一 一
三十七 年	七、一 三	六、九 三	五、七 一	三、七 一	二、三 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	三、一 一
三十九 年	七、一 三	六、九 三	五、七 一	三、七 一	二、三 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	三、一 一
四十一 年	七、一 三	六、九 三	五、七 一	三、七 一	二、三 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	三、一 一
四十二 年	七、一 三	六、九 三	五、七 一	三、七 一	二、三 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	三、一 一
四十三 年	七、一 三	六、九 三	五、七 一	三、七 一	二、三 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	三、一 一
三十六 年	八、一 一	八、一 一	七、一 一	五、一 一	三、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	三、一 一
三十七 年	八、一 一	八、一 一	七、一 一	五、一 一	三、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	三、一 一
三十八 年	八、一 一	八、一 一	七、一 一	五、一 一	三、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	三、一 一
三十九 年	八、一 一	八、一 一	七、一 一	五、一 一	三、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	三、一 一
四十 年	八、一 一	八、一 一	七、一 一	五、一 一	三、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	三、一 一
四十一 年	八、一 一	八、一 一	七、一 一	五、一 一	三、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	三、一 一
四十二 年	八、一 一	八、一 一	七、一 一	五、一 一	三、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	三、一 一
四十三 年	八、一 一	八、一 一	七、一 一	五、一 一	三、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	三、一 一
三十六 年	八、一 一	八、一 一	七、一 一	五、一 一	三、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	三、一 一
三十七 年	八、一 一	八、一 一	七、一 一	五、一 一	三、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	三、一 一
三十八 年	八、一 一	八、一 一	七、一 一	五、一 一	三、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	三、一 一
三十九 年	八、一 一	八、一 一	七、一 一	五、一 一	三、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	三、一 一
四十 年	八、一 一	八、一 一	七、一 一	五、一 一	三、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	三、一 一
四十一 年	八、一 一	八、一 一	七、一 一	五、一 一	三、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	三、一 一
四十二 年	八、一 一	八、一 一	七、一 一	五、一 一	三、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	三、一 一
四十三 年	八、一 一	八、一 一	七、一 一	五、一 一	三、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	一、一 一	三、一 一

横濱港内國貿易船入港表

本表ノ値數ハ登簿ニ依リ同一ノ入港ヲ以テ一般ト算ス
百噸以下ノ漁船ハ港則施行細則第十八條ニヨリ專ラ一定ノ港津間ナ往復タル沿海航路船ナリ

橫濱港內外國貿易船入港總計表

四十二年	三〇〇	毛	六六	七九	六九	一ヶ年平均
四十三年	二八五	毛	六六	七九	六九	一ヶ年平均
	二六六	毛	六六	七九	六九	一ヶ年平均
	二四六	毛	六六	七九	六九	一ヶ年平均
	二二六	毛	六六	七九	六九	一ヶ年平均
	二〇六	毛	六六	七九	六九	一ヶ年平均
	一八六	毛	六六	七九	六九	一ヶ年平均
	一六六	毛	六六	七九	六九	一ヶ年平均
	一四六	毛	六六	七九	六九	一ヶ年平均
	一二六	毛	六六	七九	六九	一ヶ年平均
	一〇六	毛	六六	七九	六九	一ヶ年平均
	八六	毛	六六	七九	六九	一ヶ年平均
	六六	毛	六六	七九	六九	一ヶ年平均

東京河内入津船舶調表

論說及報告

八〇四

東京品川入津船舶調查表

年	艘數	噸數	艘數	噸數	艘數	噸數	合計
年	艘數	噸數	年	艘數	噸數	年	艘數
三九〇	三六二	一七〇	三五八	一〇九	一三〇	一〇九	八〇四
三九一	三六一	一七〇	三五九	一〇九	一三〇	一〇九	八〇五
三九二	三六〇	一七〇	三六〇	一一〇	一二〇	一一〇	八〇六
三九三	三六〇	一七〇	三六一	一一〇	一二〇	一一〇	八〇七
三九四	三六〇	一七〇	三六二	一一〇	一二〇	一一〇	八〇八
三九五	三六〇	一七〇	三六三	一一〇	一二〇	一一〇	八〇九
三九六	三六〇	一七〇	三六四	一一〇	一二〇	一一〇	八〇九
三九七	三六〇	一七〇	三六五	一一〇	一二〇	一一〇	八〇九
三九八	三六〇	一七〇	三六六	一一〇	一二〇	一一〇	八〇九
三九九	三六〇	一七〇	三六七	一一〇	一二〇	一一〇	八〇九
四〇〇	三六〇	一七〇	三六八	一一〇	一二〇	一一〇	八〇九
四〇一	三六〇	一七〇	三六九	一一〇	一二〇	一一〇	八〇九
四〇二	三六〇	一七〇	三七〇	一一〇	一二〇	一一〇	八〇九
四〇三	三六〇	一七〇	三七一	一一〇	一二〇	一一〇	八〇九
四〇四	三六〇	一七〇	三七二	一一〇	一二〇	一一〇	八〇九
四〇五	三六〇	一七〇	三七三	一一〇	一二〇	一一〇	八〇九
四〇六	三六〇	一七〇	三七四	一一〇	一二〇	一一〇	八〇九
四〇七	三六〇	一七〇	三七五	一一〇	一二〇	一一〇	八〇九
四〇八	三六〇	一七〇	三七六	一一〇	一二〇	一一〇	八〇九
四〇九	三六〇	一七〇	三七七	一一〇	一二〇	一一〇	八〇九
四一〇	三六〇	一七〇	三七八	一一〇	一二〇	一一〇	八〇九
四一〇	三六〇	一七〇	三七九	一一〇	一二〇	一一〇	八〇九

年	艘數	噸數	年	艘數	噸數	年	艘數
三九〇	二九八	一六六	三九一	二九九	一六七	三九二	二九九
三九一	二九九	一七七	三九二	二九九	一六八	三九三	三〇一
三九二	三〇〇	一八一	三九三	三〇四	一六九	三九四	三〇四
三九三	三〇一	一八一	三九四	三〇四	一七〇	三九五	三〇五
三九四	三〇二	一八一	三九五	三〇六	一七一	三九六	三〇六
三九五	三〇三	一八一	三九六	三〇六	一七二	三九七	三〇七
三九六	三〇四	一八一	三九七	三〇七	一七三	三九八	三〇八
三九七	三〇五	一八一	三九八	三〇八	一七四	三九九	三〇九
三九八	三〇六	一八一	三九九	三〇九	一七五	四〇〇	三一〇
三九九	三〇七	一八一	四〇〇	三一〇	一七六	四〇一	三一〇
四〇〇	三〇八	一八一	四〇一	三一〇	一七七	四〇二	三一〇
四〇一	三〇九	一八一	四〇二	三一〇	一七八	四〇三	三一〇
四〇二	三〇九	一八一	四〇三	三一〇	一七九	四〇四	三一〇
四〇三	三〇九	一八一	四〇四	三一〇	一七九	四〇五	三一〇
四〇四	三〇九	一八一	四〇五	三一〇	一七九	四〇六	三一〇
四〇五	三〇九	一八一	四〇六	三一〇	一七九	四〇七	三一〇
四〇六	三〇九	一八一	四〇七	三一〇	一七九	四〇八	三一〇
四〇七	三〇九	一八一	四〇八	三一〇	一七九	四〇九	三一〇
四〇八	三〇九	一八一	四〇九	三一〇	一七九	四一〇	三一〇
四〇九	三〇九	一八一	四一〇	三一〇	一七九	四一〇	三一〇
四一〇	三〇九	一八一	四一〇	三一〇	一七九	四一〇	三一〇

橫濱入港最大船舶表

論說及報告

年次	品船名	川沖主登總噸數長	品川及河內入津最大船舶表	年次	外國船名	船	年次	日本船名	船
四四四年三月	同同同同ミネソタ	同同同同大北鐵道	四四四年三月	同同同同天丹信安	同同同同太洋漁船	船	四四四年三月	同同同同日本郵船	船
四四年三月	サイベニア	洋漁船株式會社	四四年三月	同同同同東洋漁船	主	四四年三月	同同同同郵船株式會社	主	
四四年三月	マントニア	同	四四年三月	同同同同	登總	四四年三月	同同同同	登總	
四四年三月	タニア	同	四四年三月	七三、四七三六	薄噸數	四四年三月	三六、九四	薄噸數	
四四年三月	ア	同	四四年三月	二四六四九三	長	四四年三月	五九、四五	長	
四四年三月		同	四四年三月	六五二六六八	サ	四四年三月	五四七三〇七	サ	
四四年三月		同	四四年三月	五四七三〇七	幅	四四年三月	六一、〇〇	幅	
四四年三月		同	四四年三月	五四七三〇七	載空貨船	四四年三月	五〇、二五	載空貨船	
四四年三月		同	四四年三月	四四五、〇〇	吃水	四四年三月	四七、五〇	吃水	
四四年三月		同	四四年三月	四五六、四〇	米	四四年三月	六六、〇〇	米	
四四年三月		同	四四年三月	四五八、〇〇		四四年三月	二九〇九〇四		
四四年三月		同	四四年三月	三一、二一、一八、五四六一、二九〇九〇四		四四年三月	二一、四六、六〇〇〇		
四四年三月		同	四四年三月	〇〇〇〇〇〇		四四年三月	〇〇〇〇〇〇		

論說及報告

八〇六

四	四	四	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十
三	二	一	九	八	七	六	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
歎	安	十	東	第	同	經	東									
晃	全	日	號	榮	基											
丸	丸	丸	丸	丸	丸	丸	河	船	名							
同	中	池	田	村	同	井	辰									
村	川	代	瀬	上		馬		船	(本表ノ各船ハ皆帆船ナリ)							
三	力	寅	市	興				主								
之	太	三	之	兵												
丞	郎	吉	助	衛	平											
登	梯	梯	噸	噸	數											
二三	同	同	二三	二二	二二	三三	三四	岸	右							
二七			二七	三三	三三	三四	三四	社	近							
九〇			九〇	七九	七九	八六	八六	資	權							
八六				七九	七九	七九	七九	明	左							
								仁	衛							
								三	門							
								郎	郎							

四	四	四	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十	十
三	二	一	九	八	七	六	年	年	年	年	年	年	年	年	年	年
歎	安	十	東	第	同	經	東									
晃	全	日	號	榮	基											
丸	丸	丸	丸	丸	丸	丸	河	船	名							
同	中	池	田	村	同	井	辰									
村	川	代	瀬	上		馬		船	(本表ノ各船ハ皆帆船ナリ)							
三	力	寅	市	興				主								
之	太	三	之	兵												
丞	郎	吉	助	衛	平											
登	梯	梯	噸	噸	數											
二三	同	同	二三	二二	二二	三三	三四	岸	右							
二七			二七	三三	三三	三四	三四	社	近							
九〇			九〇	七九	七九	八六	八六	資	權							
八六				七九	七九	七九	七九	明	左							
								仁	衛							
								三	門							
								郎	郎							

築港竣工後内外國貿易貨物ニ對スル荷役費節減額比較表

本表ハ輸入貨物ニ對スル経費ノ調査ナリ輸出貨物ニ對スル費額ハ荷役方法大體其軌ナリ
 ニスルヲ以テ便宜上省略シタリ又本表ハ東京築港内ニ税關ヲ設ケラル、モノトシテノ計
 算ナリ

種類	區	別	現在	現
			船在	船
			沿岸	沿岸
外航貨物	物貨航內	(一) 現在ニ於テハ横濱税關埠荷役ノ上水路東京へ輸送ノ場合 將來ニ於テハ東京築港内本船ヨリ解取中検査ヲ經テ水路東京へ輸送ノ場合	一九六〇	四
(二) 現在ニ於テハ横濱税關埠荷役ノ上水路東京へ輸送ノ場合 將來ニ於テハ東京築港内本船ヨリ解取中検査ヲ經テ其儘市内隨所ノ倉庫へ小解引取ノ場合	一八五〇	一九六〇	四	船在
(三) 現在ニ於テハ横濱税關埠荷役ノ上水路東京へ輸送ノ場合 將來ニ於テハ東京築港内本船ヨリ解取一旦税關ニ陸揚ノ上水路市内隨所ノ倉庫へ引取ノ場合	一四九七	一三〇七	四	沿岸
現在ニ於テハ横濱税關埠荷役ノ上水路東京へ輸送ノ場合 將來ニ於テハ東京築港内本船ヨリ解取一旦税關ニ陸揚ノ上水路市内隨所ノ倉庫へ車馬引取ノ場合	七四三	一〇二三	四	沿岸
現在ニ於テハ横濱港内本船ヨリ解取直チニ東京へ輸送ノ場合 將來ニ於テハ東京築港内本船ヨリ解取其儘市内隨所ノ倉庫へ引取ノ場合	五八三	七五三	四	沿岸
築港ノ場合外航貨物ニ對スル經費節減額内譯表	合計	一一七五	五九二	五九二
本表ハ輸入荷物ニ對スル經費ノ調査ナリ輸出荷物ニ對スル費額ハ大底之ト其軌チ一ニス ルナ以テ便宜上省略シタリ尙本表ハ税關モ東京築港ニ設ケラル、モノトシテノ計算ナリ	譯	一一七五	五九二	五九二
(一) 横濱税關埠荷役ノ上水路東京へ輸送ノ場合 横濱ニ於テ本船ヨリ直接税關埠内へ陸揚費	内	一一七五	五九二	五九二
同上解運送海上保險料(一噸貳百圓ノ平均價格ニ付)				
同税關埠内倉入仕分積付足貨				
同税關上屋使用料(一日一噸貳錢ノ割)				
同税關ヨリ解ニ移置費				
横濱税關ヨリ東京迄解貨(但シ泊貨等ナ見込ム)				
同上解運送海上保險料(一噸貳百圓ノ平均價格ニ付)				
東京ニ於テ解ヨリ隨所ノ倉庫ニ陸揚費				

總說及報告

本船ノ荷物船卸ヨリ東京ニ於ケル隨所ノ倉庫へ倉入迄ノ日數ニ對スル金利見積(一噸貳百圓ノ平均價格ニ對)
(シ八日間ノ日歩式販錢ノ割)

合計
解取解中検査ヲ經テ水路東京へ輸送ノ場合

本船ヨリ東京迄浮貿(田)ノ件中検査其他ノ爲メ浮泊貿等ヲ見入ム
横濱ニ於テ本船ヨリ解ニ模移置

同上船運送海上保險料
（一噸貳百圓ノ平均價格
シ平均百圓ニ付拾八錢ノ割對）

東京ニ於ケルヨリ貿易ノ倉庫ヘ陸揚卸平定
本船ノ荷物船卸ヨリ東京ニ於ケル隋所ノ倉庫へ倉入迄ノ日數ニ對スル金利見積(一噸貳百圓ノ平均價格ニ對)
六月四日付
六月四日付

合計

横濱ニ於テ本船ヨリ直接税關檣内へ陸揚

同移讓權內僉入仕分移付人足資

同税關檻内ヨリ新橋迄汽車賃

新橋ヨリ隨所ノ倉庫ニ引取貲平均

本船ノ荷物船卸ヨリ東京ニ於ケル隨所ノ倉庫へ倉入迄ノ日數ニ對スル金利見積(シテ)五日間ノ日歩貳錢ノ割

(四) 船取一旦横濱税關ニ陸揚ノ上水路東京へ輸送ノ場合

機濱二於元本船三只船二種

同上解ヨリ税關檻内へ陸揚費
月ニ定期ニ釐使出料(一日一厘)

同上税關ヨリ解ニ積移シ發

横濱税關ヨリ東京迄船隻(但シ泊算等ナ見込ム)同上
輸送海上保險料一噸貳百圓ノ平均價格ニ對

東京ニ於テ貯ヨリ隨所ノ倉庫ニ陸揚賣平均

合計

(五) 船取一旦横濱税關ニ陸揚ノ上陸路東京へ輸送ノ場合

横濱ニ於テ本船ヨリ解ニ積移費

港築京東(來將)		船
本船ヨリ貢費增加割當(但シ主トシテ石炭消費高)	同本船税關問解質	三三〇
本船ヨリ貢費增加割當(但シ主トシテ石炭消費高)	同解質ヨリ税關務内へ陸揚費	一二〇
本船ヨリ貢費增加割當(但シ主トシテ石炭消費高)	同税關上屋使用料(一日一噸貳錢平)(約二日間ト見)	〇四〇
本船ヨリ貢費增加割當(但シ主トシテ石炭消費高)	横濱及新橋ニ於ケル汽車積卸費並ニ發着手數料共	五〇〇
本船ヨリ貢費增加割當(但シ主トシテ石炭消費高)	新橋ヨリ船所ノ倉庫ニ引取費平均	五〇〇
本船ヨリ貢費增加割當(但シ主トシテ石炭消費高)	本船ノ荷物船卸ヨリ東京ニ於ケル陸所ノ倉庫へ倉入迄ノ日數ニ對スル金利見積(シ六日間ノ日歩貳錢ノ割)	五〇〇
本船ヨリ貢費增加割當(但シ主トシテ石炭消費高)	合計(現在ノ慣行ニ鑑ミ河内ノ小舟運搬ニハ) (二) 船取解中検査ヲ經テ其儘市内陸所倉庫へ引取ノ場合	七〇〇
本船ヨリ貢費增加割當(但シ主トシテ石炭消費高)	本船ヨリ貢費(但シ船中検査其他ノ爲メ泊費等ナ見込)	二四〇
本船ヨリ貢費增加割當(但シ主トシテ石炭消費高)	合計(現在ノ慣行ニ鑑ミ河内ノ小舟運搬ニハ) (三) 船取一旦税關ニ陸揚ノ上巿内陸所倉庫へ車馬引取ノ場合	一九六〇
本船ヨリ貢費增加割當(但シ主トシテ石炭消費高)	本船ヨリ貢費(但シ船中検査其他ノ爲メ泊費等ナ見込)	一一七
本船ヨリ貢費增加割當(但シ主トシテ石炭消費高)	本船ヨリ貢費(但シ船中検査其他ノ爲メ泊費等ナ見込)	八二七
本船ヨリ貢費增加割當(但シ主トシテ石炭消費高)	本船ヨリ貢費(但シ船中検査其他ノ爲メ泊費等ナ見込)	一三〇

論說及報告

八一〇

着船

本船發關解貨

船ヨリ税關檻内へ陸揚費

税關上屋使用料(一日一噸貳錢)

税關ヨリ市内ニ至ル車馬費

本船ノ荷物船卸ヨリ隨所ノ倉庫へ倉入迄ノ日數ニ對スル金利見積(一噸貳百圓ノ平均價格ニ對シ四日間ノ日歩貳錢ノ割)

合計

築港ノ場合内航貨物ニ對スル經費節減額内譯表

本表ハ輸入荷物ニ對スル經費ノ調査ナリ輸出荷物ニ對スル額費ハ大抵之ト其軌ナニス

ルチ以テ便宜上省略シタリ

名稱(但シ每噸ニ對シ)

内譯

合計

○本船ヨリ船取直接東京へ輸送ノ場合

横濱ニテ本船ヨリ船ニ移載費

横濱東京間解貢(但シ泊費等ナ見込ム)

同上解運差海上保險料(一噸百五拾圓ノ平均價格ニ對)

東京ニテ船ヨリ隨所ノ倉庫へ陸揚費(シ平均百圓ニ付拾八錢ノ割)

本船ノ荷物船到ヨリ隨所ノ倉庫へ庫入迄ノ日數ニ對スル金利見積(一噸百五拾圓ノ平均價格ニ對シ四日間ノ日歩貳錢ノ割)

計

○築港ニテ船取其儘市内隨所ノ倉庫へ引取ノ場合

本船々費增加割當(但シ主トシテ石炭消費高)

本船ヨリ船ニ移載費

本船ヨリ市内倉庫ニ至ル解貢(但シ泊費等ナ見込ム)

倉庫へ陸揚費(現在ノ慣行ニ藍ミ河内ノ小解運費ニハ)保険ナ附セサルモノト見テノ計算ナリ

船着港築京東(來將)	着横濱(在現)	
		本船發關解貨
		船ヨリ税關檻内へ陸揚費
		税關上屋使用料(一日一噸貳錢)
		税關ヨリ市内ニ至ル車馬費
		本船ノ荷物船卸ヨリ隨所ノ倉庫へ倉入迄ノ日數ニ對スル金利見積(一噸貳百圓ノ平均價格ニ對シ四日間ノ日歩貳錢ノ割)
		合計
		内譯
○六〇	一一〇	二二五〇
二八〇	一二五	二七〇
一六〇	一七	一
五九二		一七五

合計

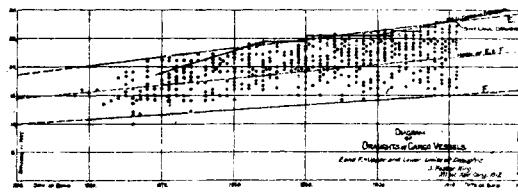
東京
輸出入内航貨物重要品別噸數調查表

(本表ハ東京ノ部ニ品川及河内荷役ノ荷物ヲ合算シタルモノナリ)

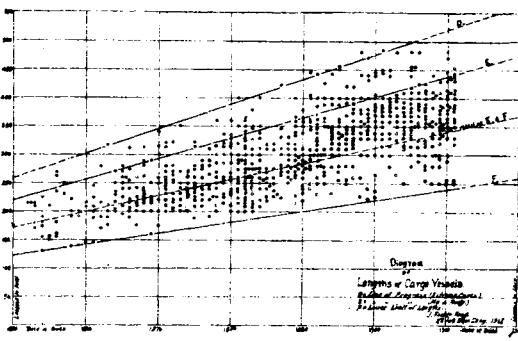
危 險 物 料 類	輸				出				輸				入				
	東 京 橫 濱 計	四 十 二 年			東 京 橫 濱 計	四 十 三 年			東 京 橫 濱 計	四 十 二 年			東 京 橫 濱 計	四 十 三 年			
		東 京	橫 濱	總 合													
味 酒 洋 酒 及 啤 露 水 及 威 士 忌 酒 等 類	—	107	250	357	—	110	440	550	—	—	107	250	357	—	107	250	357
機 械 類	—	21	48	69	—	1	11	12	—	—	21	48	69	—	21	48	69
材 料 類	—	10	17	27	—	1	11	12	—	—	10	17	27	—	10	17	27
石 炭 類	—	49	11	60	—	4	9	13	—	—	49	11	60	—	49	11	60
礦 物 及 碳 化 物	—	2	1	3	—	1	1	2	—	—	2	1	3	—	2	1	3
石 炭 哥 ニ ク ス	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
木 器 類	—	10	3	13	—	1	1	2	—	—	10	3	13	—	10	3	13
肥 料 類	—	1	1	2	—	1	1	2	—	—	1	1	2	—	1	1	2
穀 類	—	1	1	2	—	1	1	2	—	—	1	1	2	—	1	1	2
鹽 類	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—

世界ニ於ケル貨物船ノ大サ

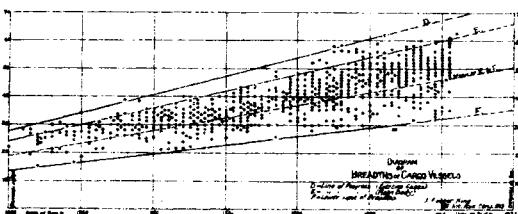
水 吃



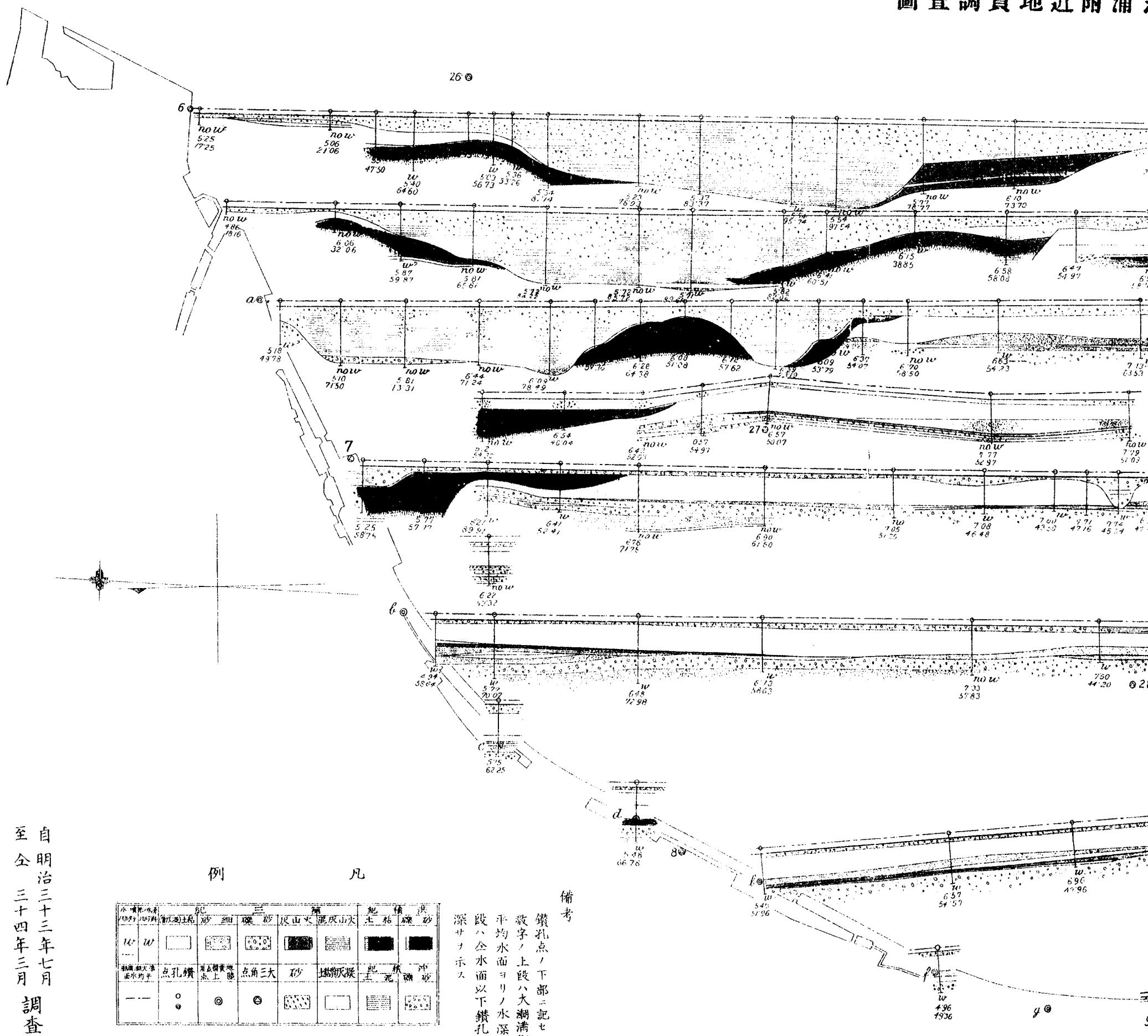
長 船



幅 船

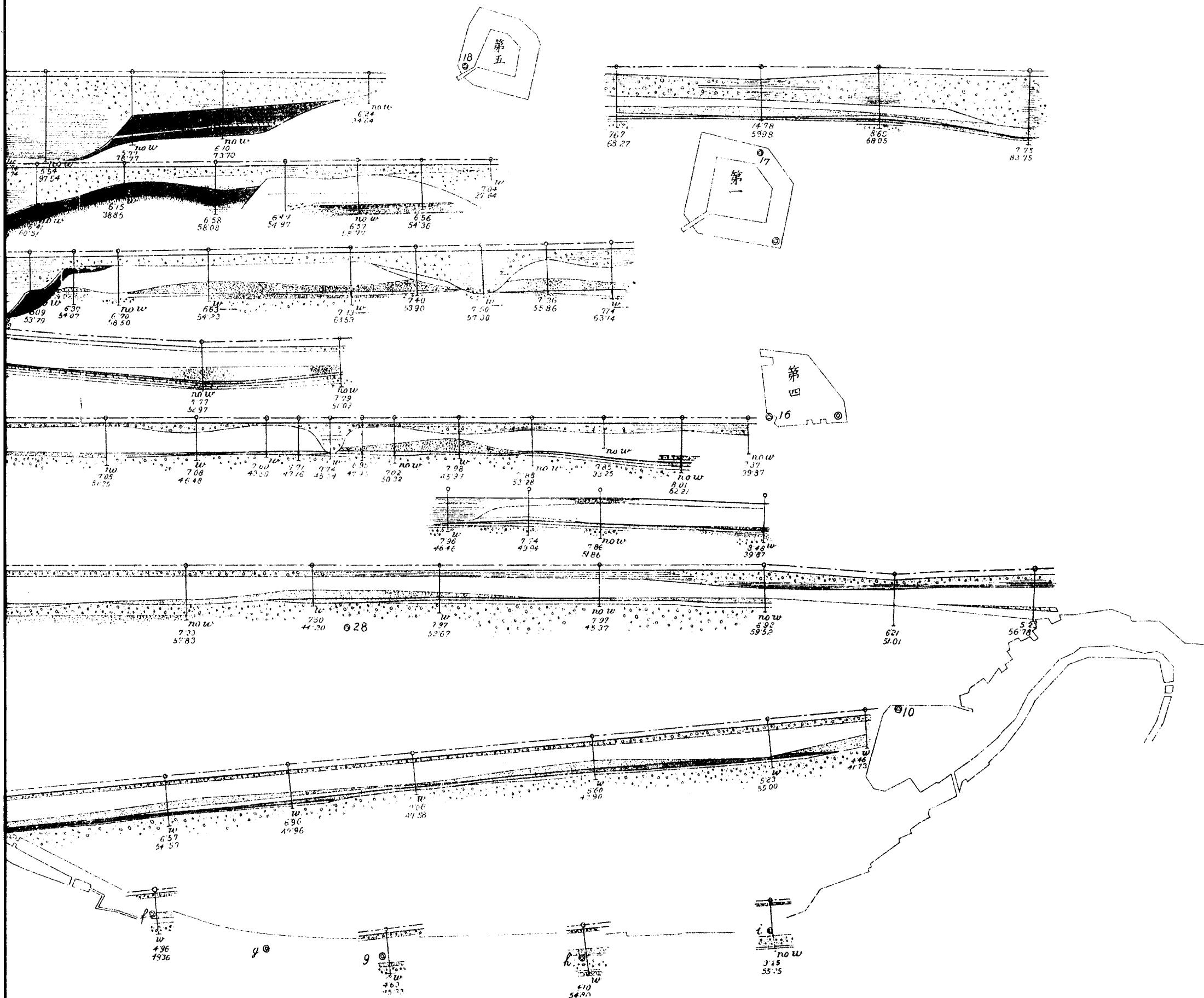


浦附近地質調查圖

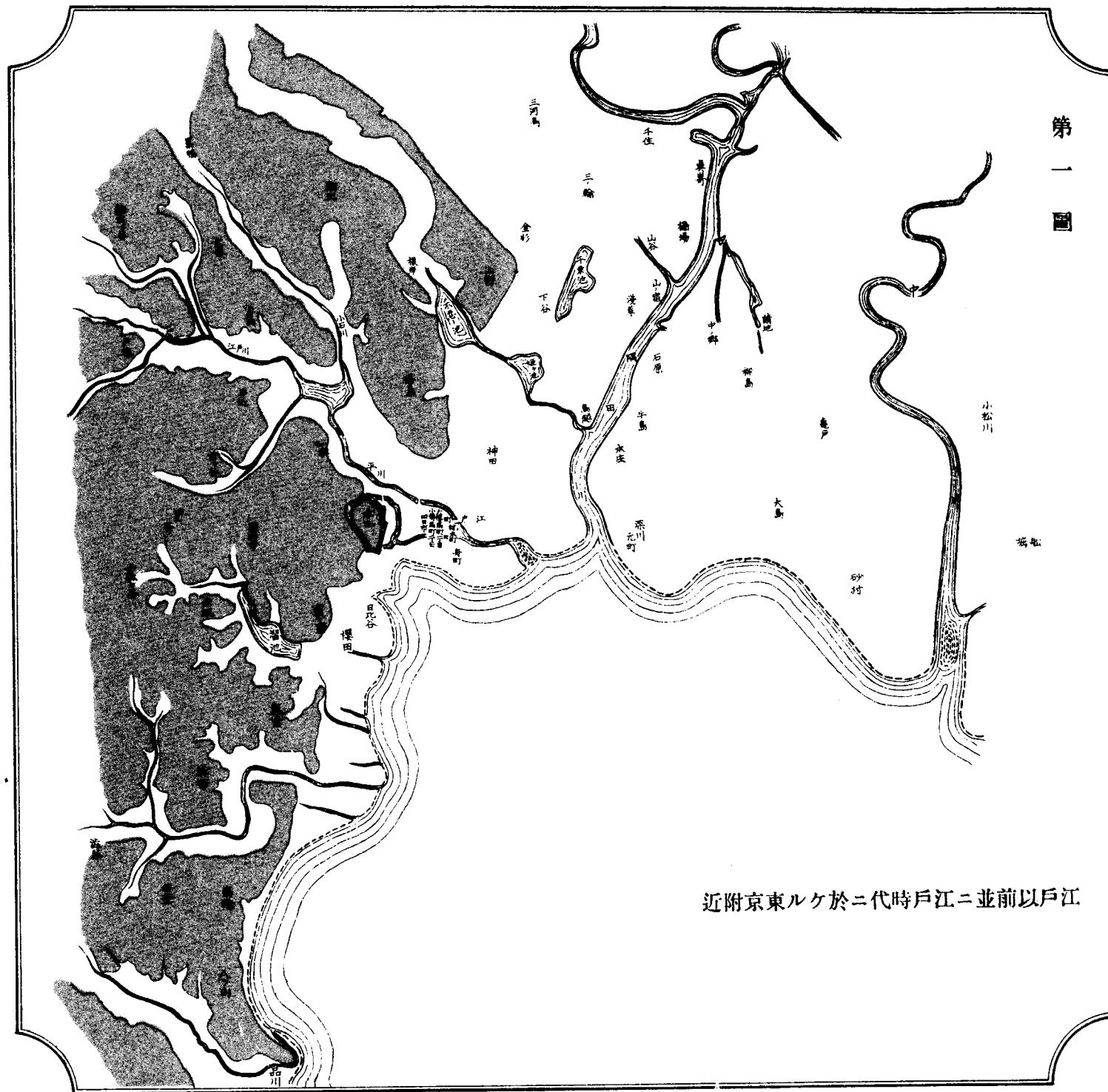


自明治三十三年七月
至三十四年三月調査

芝浦附近地質調查圖

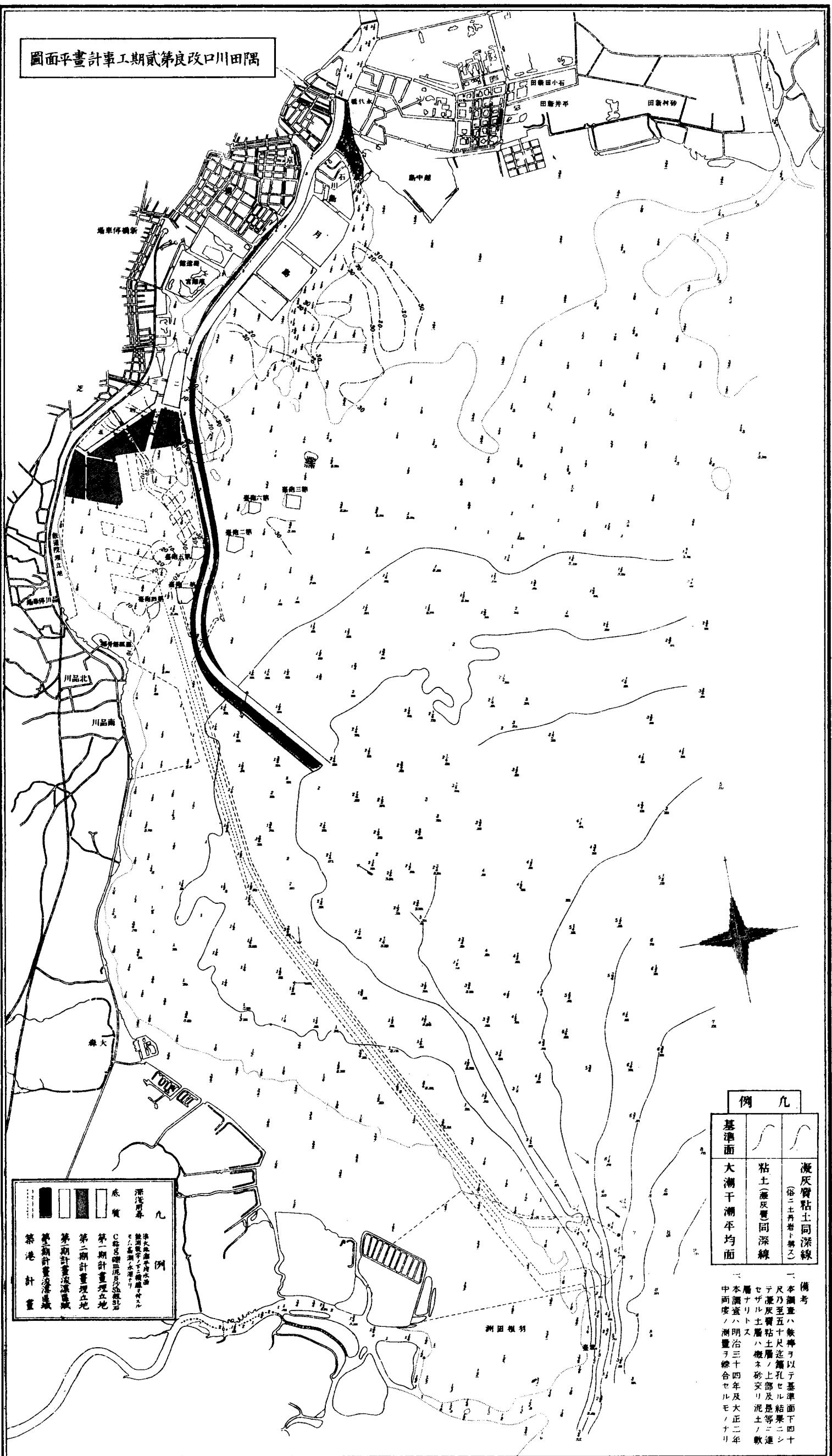


第一圖



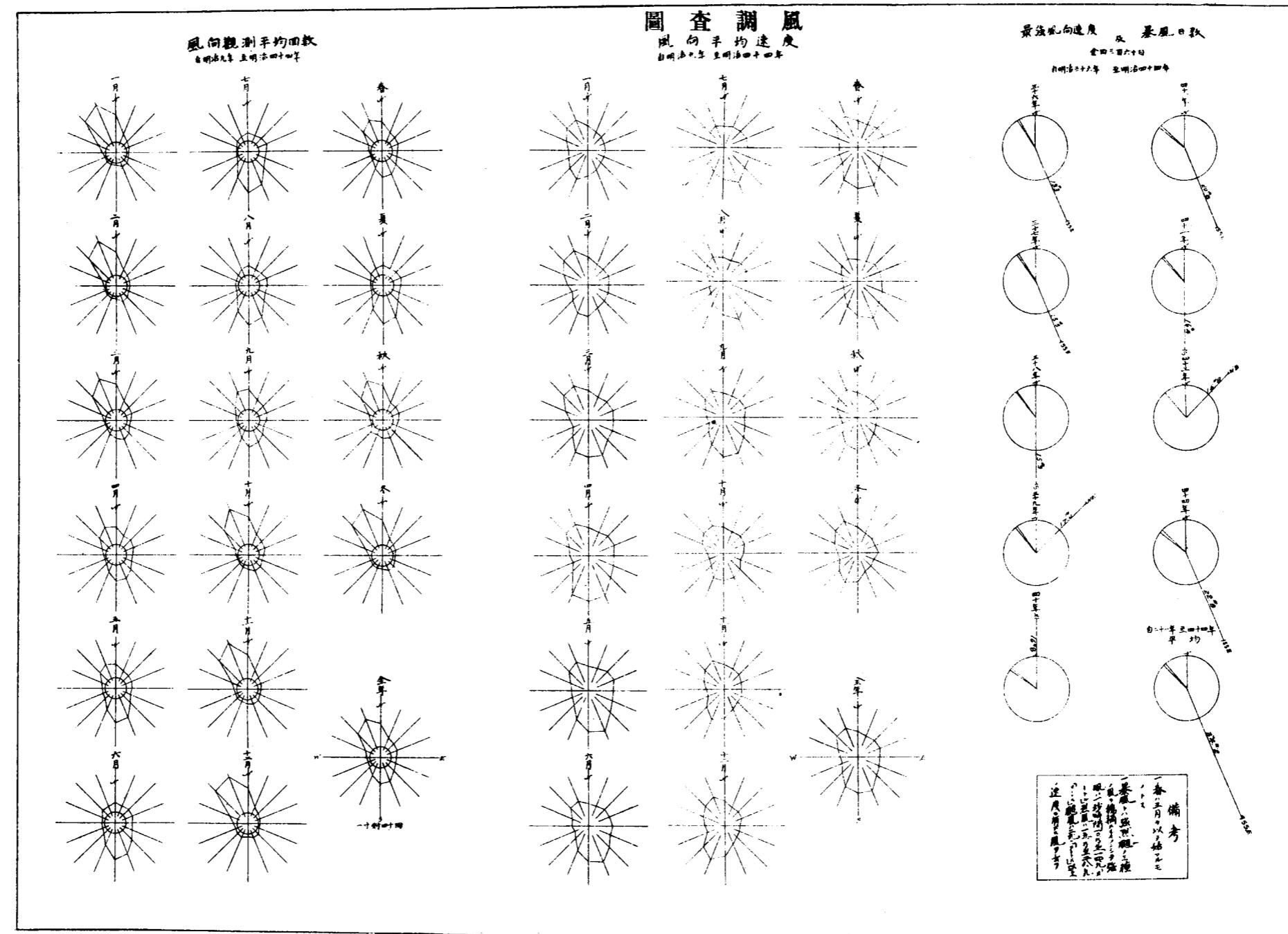
近附京東ルケ於ニ代時戸江ニ並前以戸江

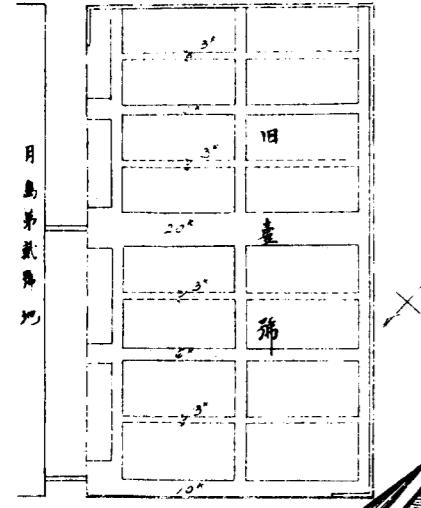
隅田川口改良工二期計画圖面



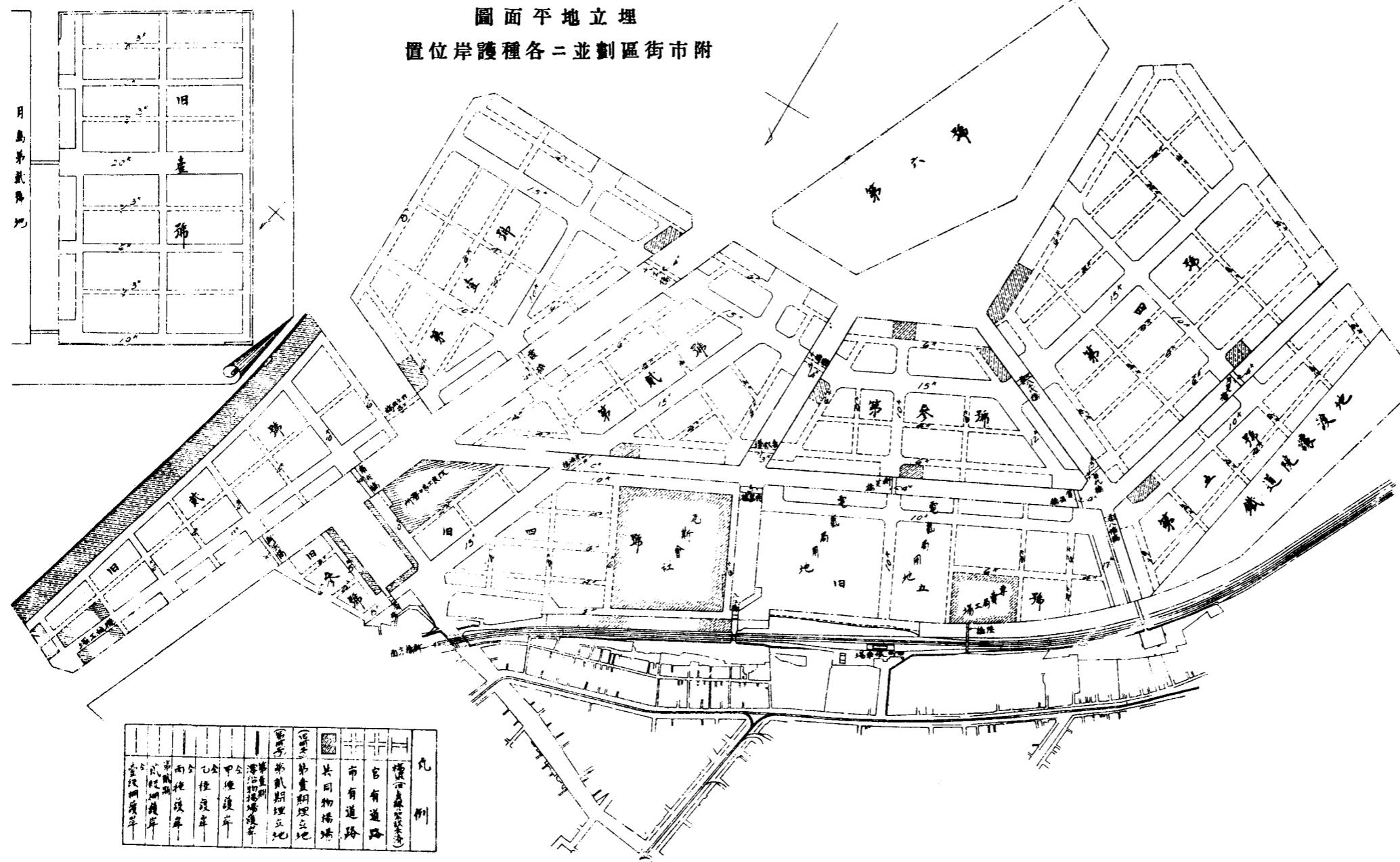
月島附近倉庫分布圖







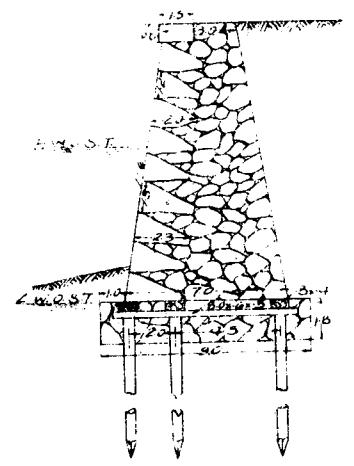
圖面平地立埋
位置岸護種各二並劃區街市附



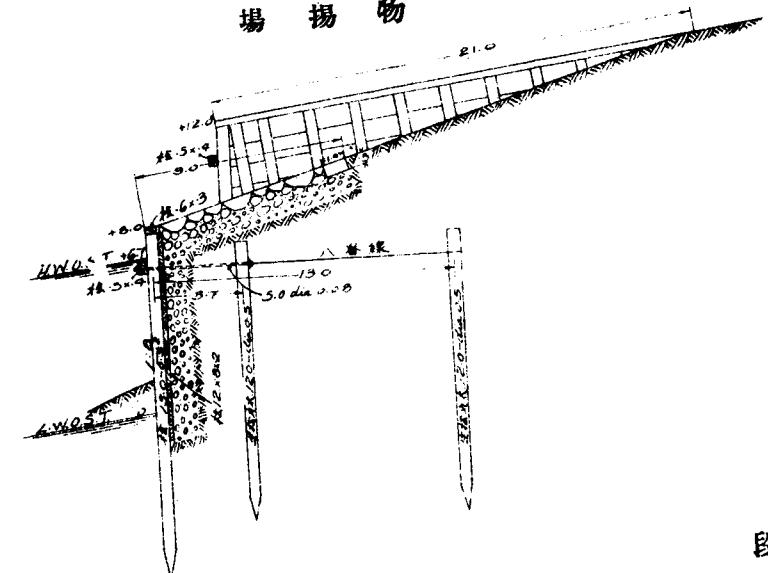
官有道路	市有道路
共同物場	
第貳號埋立地	
中公築堤	
河川築堤	
河川築堤	
第貳號築堤	
公地築堤	
河川築堤	
河川築堤	

各種護岸橫斷面圖

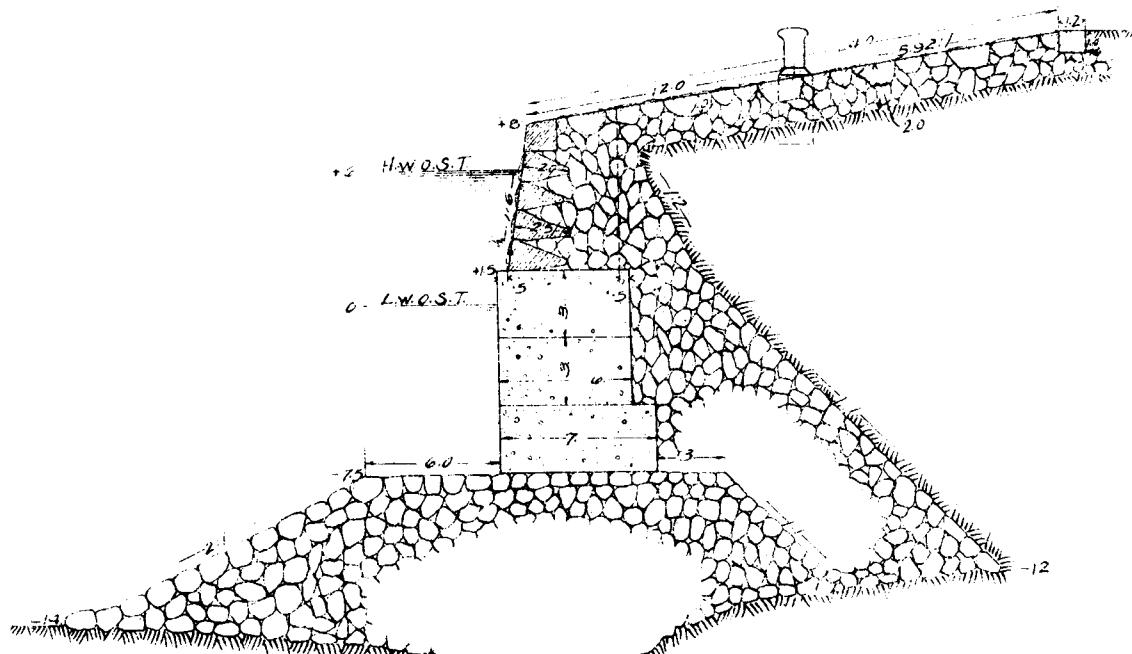
岸護種丙



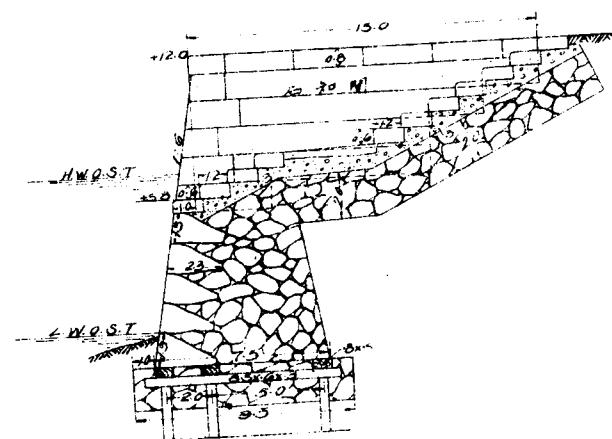
第一期工事
物揚場



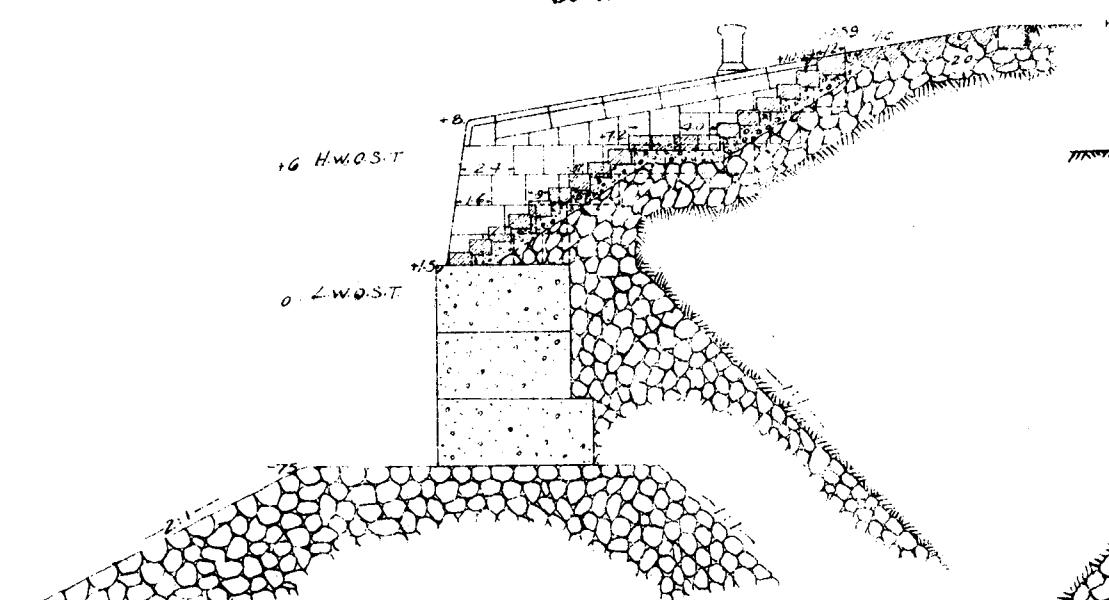
沿濱物揚場



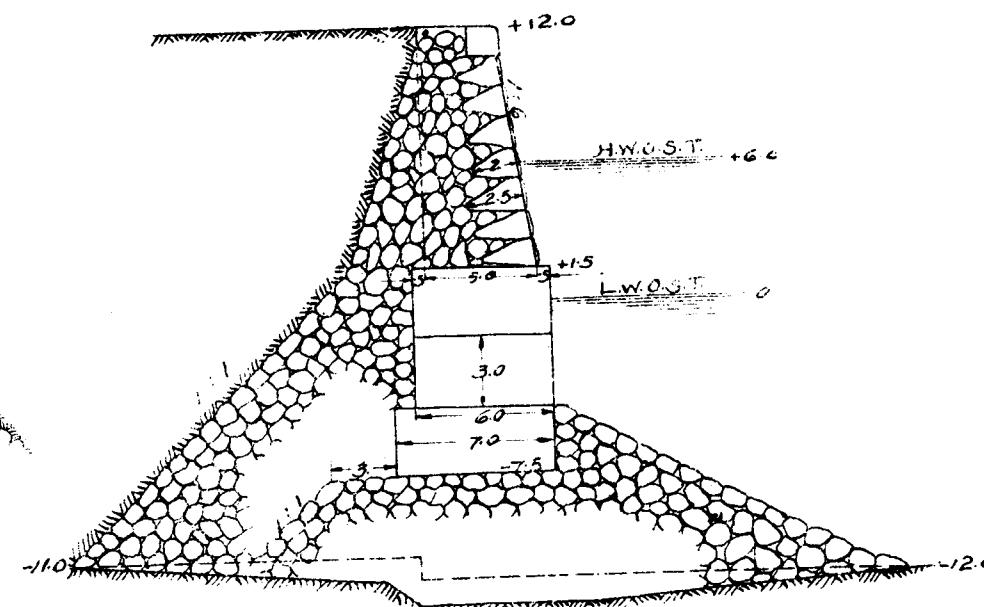
全階段



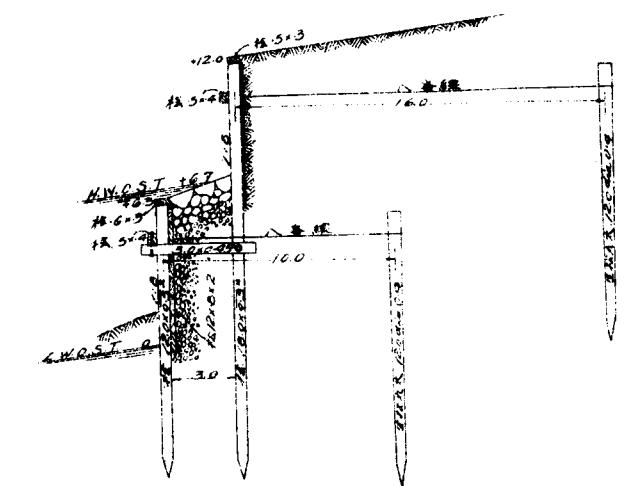
全階段



甲種護岸



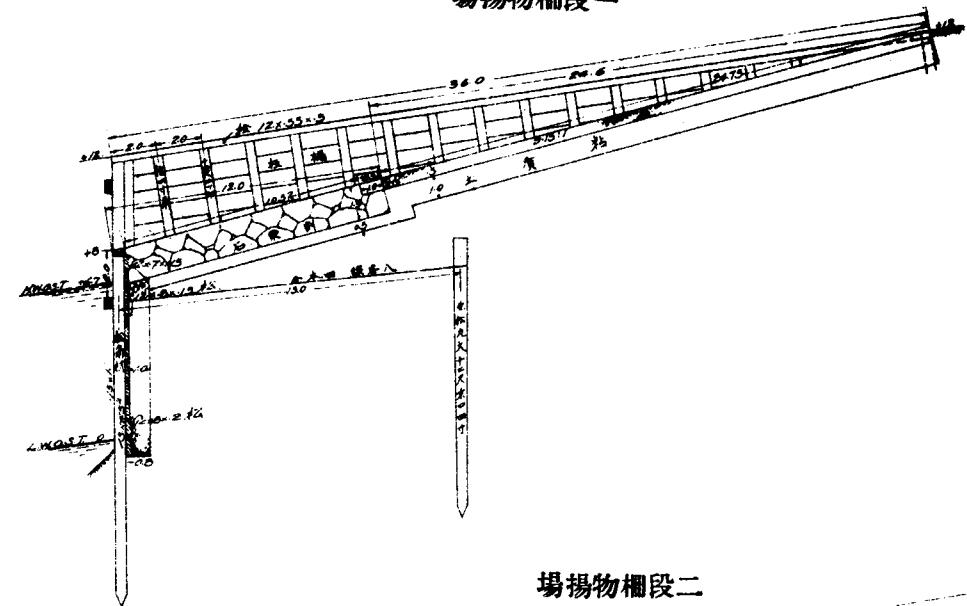
乙種護岸



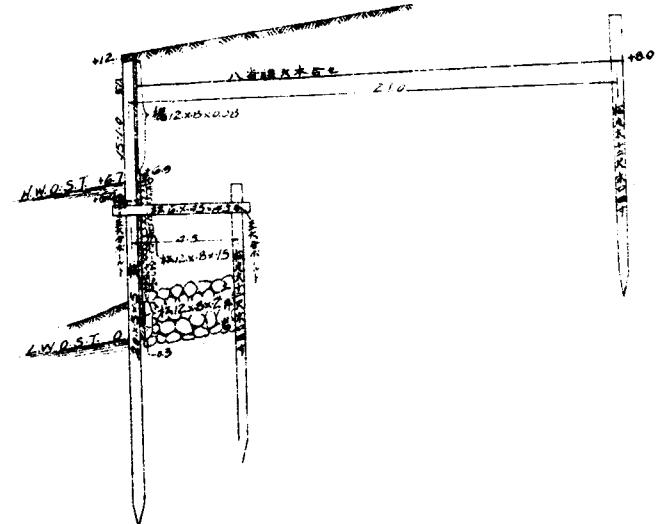
各種護岸橫斷面圖

事工期二第

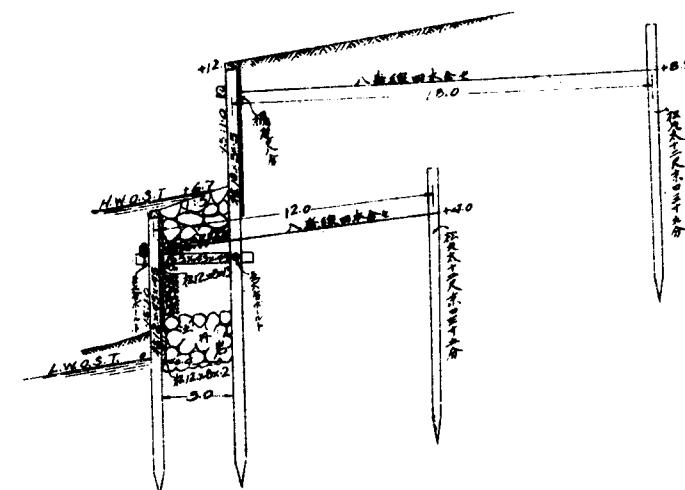
場揚物柵段一



岸護柵段一



岸護柵段二



場揚物柵段二

